
魔法生徒 白銀

鍵一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法生徒 白銀

【Nコード】

N7443K

【作者名】

鍵一

【あらすじ】

この物語は主人公最強系です。ハーレムを形成する可能性もあります。そう言った物が苦手な方はご容赦ください。

また、この物語は主に作者の思い付きです。更新が停止する可能性を多分に含んでおります。

それでも構わないという方でもそうでない方もご自由にどうぞ。

1 時間目 銀髪紅眼を中二病と呼ばせない (前書き)

他に二つの作品があるのに三つ目を書いてしまいました。

あまり出来は良くないのですが、楽しんで頂けたら幸いです。

また、キャラの口調が違うとか性格違くない？等の指摘がございましたら、作者が傷つかない程度にお願い申し上げます。

1時間目 銀髪紅眼を中二病と呼ばせない

ここは麻帆良学園。幼等部から大学部までの学術機関が存在する、学園都市である。

本来ならば、大勢の生徒たちで賑わう麻帆良学園だが、今は別の世界であるかの如く、静まり返っている。

それもその筈、今の時刻は午後十一時五十分。もうすぐ日付が変わるこの時間帯に出歩く様な者は一部を除いて存在しない。

その一部とは、寮の門限を守らない不良生徒（麻帆良学園は中等部以上は全寮制である）。その不良生徒を取り締まる見回りの教師、又は警備員である。

だが、そのどれにも当てはまらない少年が、麻帆良郊外の森を歩いていた。

その少年は黒いコートに身を包み、辺りを警戒しながら歩いていた。少年の名は立花^{たちはなしろがね}白銀。

麻帆良学園男子高等部、二一Aに在籍している生徒だ。

彼は白銀の髪を背中の中ほどで邪魔にならないように紐で纏めている。そして、彼の瞳はまるで血のように紅い。

肌は色白で瑞々しく、顔立ちが中性的なことも相俟って、女性と間違われることもよくあるようだ。男物の服を着ているのに間違える方がおかしいとは本人の談。

「報告ではこの辺りなんだけどなあ……」

白銀は少し開けた場所で立ち止まり、そう呟きながらズボンのポケットから携帯電話を取り出した。

「うん。ここで間違いない」

携帯電話をしまうと、白銀は近くの切り株に腰を降ろした。

（人払いの結界を張ってあるのに人の気配も人外の気配もナシ……か。今日はもう、関西呪術協会の奴等も諦めたのか？）

麻帆良は関東魔法協会という西洋魔術師の本拠地である。当然、魔法関係のトラブルも起こる。関西呪術協会というのは、日本古来から存在する呪術師や陰陽師などが結成した組織で、関東魔法協会とは敵対関係にあると言っても過言ではないだろう。

（来るなら速く来いよ。俺はもう帰って寝たい……）

そしてこの麻帆良学園にも魔法関係者がいる。白銀も魔法生徒と呼ばれるその一人だ。

だが、今の白銀はヤル気0……、基本的に面倒なことは嫌なのだ。夜の警備だって、報酬が貰えなければ絶対にやらないだろう。

ヤル気なさ気に星を眺めていた白銀だったが、何故か急に立ち上がった。

「ようやくお出ましか……。なるほど。時限式の召喚術か……」

白銀の前に日本昔話に出てきそうな鬼や妖怪が出現した。

白銀は携帯電話を取り出し、画面を見る。そこには、0..00と表情されていた。

「にいちゃん、関係者か？」

金棒を持った赤鬼が白銀に話しかける。

白銀は携帯電話をしまいながら、ああと短く答える。

「じゃあ、敵だな」

「そうだな。俺としては面倒だからお帰り願いたいが……それも無理だろうしな」

白銀はゆつくりと顔を上げ、心の底からダルそうに言った。

「じゃあ、殺るか」

翌朝、白銀は女子中等部にある学園長室にいた。昨夜の報告をする為だ。

「いつも思うが、何でイチイチ呼び出すんだ？ケータイで連絡すれば手間も省けるのに……」

「ふおっふおっふおっ。まあそう言うでない。白銀君の顔を見るのも久し振りじゃからのお」

「昨日会ったばかりだろうが、遂にボケたか？ジジイ」

「随分な言い草じゃのお……。わし泣きそう」

白銀の辛辣な言葉も、学園長の対応もいつものこと。言わばコミュニケーションのようなものだ。

「どうせ嘘泣きだろ？……………そんなことより、昨日の件だが……」

白銀の呆れたような表情も引き締まり、学園長である近衛近右衛門も関東魔法協会のトップの顔に変わる。

「俺の担当した場所には人払いの結果は張ってあったが術者はいなかったし、人外の気配もなかった。だが、日付が変わるのと同様に人外が召喚された。恐らく時限式の召喚札でも貼ってあったんだろうな。で、そいつらと交戦し、殲滅した。以上」

「ふむ……………。人外の種族と強さはどうじゃった？」

「鬼、鳥人の二種族だ。雑魚ばかりで、実戦経験のない魔法生徒でも二人一組なら充分対応できるレベル。数も十体と少なかったしな」

「うむ。ご苦労じゃったな。報酬は口座に振り込んだから、後で確認するようにの」

報告が終わったのでいつもの飄々とした雰囲気に戻った。白銀も相変わらず切替えの速い爺さんだなど苦笑しながら了解と返す。

「そういや、サウザンド・マスターの息子っていつ来るんだ？」

「今日、二一Aの担任教師として赴任する予定じゃ。もうすぐここにくるじゃろ」

「今日！？しかも二一Aかよ！？……………大丈夫なのか？色々……………」

あのA組には、魔法関係者等の“特別な事情”を持つ生徒が一纏め

にされている。そんないろんな意味で濃い生徒たちに囲まれて大丈夫なのかと白銀は心配した。

「大丈夫じゃろ。他の魔法先生も気付かれんようサポートするからの」

「まあ、爺さんがいいって言うんなら、俺からは何も言わねえさ」

二一Aには学園長の孫娘である近衛木乃香が在籍している。親の方針で魔法のことは教えていない。

（このジジイ……、まさかこのかに魔法のことを知られてもいいと思うってんのか？）

魔法のことを知れば、裏の住人になるか、記憶処理をされるか、魔法のことを知りながら一般人として過ごすのかの三つしか選択肢がない。

（まあ、爺さんが決めたことだ。所詮、他人でしかない俺が口出しすることじゃないな）

白銀はこのかとはちょっとした縁があり、お互いの携帯電話の番号を交換している。白銀にとっても、このかは大切な人間の内の一人なのだ。心配しない筈がない。

だが、肉親である学園長が決めたことだ。それに自分が反対するのはお門違いだと白銀は思った。

（全く、白銀君は素直じゃないのお。心配しとるくせに意地を張るんじゃないから）

しかし、そんな白銀の考えは学園長には筒抜けで、微笑ましく思っていた。

「そんなじゃ、用は済んだし、もう行くぜ？」

「なんじゃ……、ネギ君には会わんのか？」

「別に今会わなくてもいいだろ。それにそろそろ出ないとHRに間に合わないしな」

白銀も一応高等部の生徒だ。遅刻するのはマズい。

「刀子君にはわしが連絡しておいたから遅刻しても大丈夫じゃぞ？」

刀子、というのは白銀の担任教師の葛葉刀子のことだ。

常に冷静沈着で、ストレートロングヘアの美女。当然、クラスの男子にも人気は高い。魔法関係者でもある。

「……………どうしても俺をそのネギってのに会わせたいみたいだな」

「顔を合わせるの早い方が都合がいいからの」

「そりゃそっちの都合だろうが！」

白銀の指摘にも、学園長はふおっふおっふおと笑って誤魔化すのだった。

あれから五分程経った頃だろうか、学園長室に怒声が響き渡った。

「学園長先生！ 一体どーゆーことなんですか!？」

そう学園長に言い寄っているのは、神楽坂明日菜。

オレンジ色の長い髪をツインテールにしている、活発そうな印象を受ける少女だ。

その後ろには、顔を強張らせている十歳前後の赤髪の少年がいた。恐らく、彼がネギ・スプリングフィールドだろうと白銀は当たりをつけた。

と、そんな風に壁際で二人を観察していた白銀に、大和撫子という言葉がぴたり当てはまるような容姿をしている少女、木乃香が話しかけた。

「なあなあしろくん、なんでこんなところにおるん？」

「ん？このかか…。爺さんに呼び出されてな。ついでにこのかの担任になる子供先生ってのがどんなのか見ておこうと思ってな」

「そうなんや」

“しろくん”というのは木乃香が白銀につけたニックネームで、最初は白銀も嫌がったが、涙目で『イヤなん?』と言われて仕方なく了承したのだ。いつの時代も女の子の涙には男は勝てないのである。

「まあまあ明日菜ちゃんや、とりあえずは教育実習ということになるじやろう。今日から三ヶ月。頑張りなさい」

明日菜の抗議など、耳に入っていないのでは?と疑ってしまうくら

い、学園長は華麗にスルーした。

「ところでネギ君は彼女はおるのか？　どうじゃな、ワシの孫娘のこのかなぞ」

「ややわじいちゃん」

学園長のいつもの悪い癖が始まるのと同時に、木乃香はカナヅチを取り出し、その後頭部に振り下ろす。

「爺さん、またそんなことやってんのか……。いい加減にしたらどうなんだ？」

「だってだって、はよう曾孫の顔がみたいんじゃもん」

「ジジイが“もん”とか付けんな！　気持ち悪い！」

白銀が割と本気で気持ち悪がっていると、その存在に初めて気がついたのか、明日菜が白銀に話しかける。

「そういえばさっきから気にはなってたんだけど、あんた誰？　このかと知り合いみたいだけど……」

「俺は立花白銀。男子高等部の二年だ。このかとは爺さんの趣味に巻き込まれた仲だ」

学園長の趣味は明日菜も知っていた。それは孫の木乃香にお見合いをさせることだ。

年が10も20も離れた相手とお見合いさせられることもあると木乃香が言っていたことを明日菜は覚えている。

「てことはこのかはあんたともお見合いさせられてたってこと……！？……じゃなくてですか！？」

白銀が年上であることを思い出し、明日菜は慌てて敬語で言い直す。

「ま、そういうこったな。後、無理に敬語を使う必要はない。俺のことも好きに呼べ」

「じゃあ白銀って呼ぶわ。私は神楽坂明日菜。私のこともアスナでいいわ」

「そうか。よろしくな。アスナ」

お互いに手を差し出し、握手を交わした。

二人の間に木乃香を通して友情が生まれた瞬間だった。

「て、そうじゃなくて、大体子供が先生なんておかしいじゃないですか！しかもウチの担任なんですか！？」

白銀と握手しているかと思えば、急に思い出したかのように学園長への抗議を再開する明日菜。

白銀はそんな明日菜を見て、落ち着きのない奴だなと思った。

「まあまあ、これには深い事情があるんじゃないよ。ふおっふおっふお」

学園長は学園長で、相変わらず涼しい顔で笑うだけだった。

だが、突然表情を引き締め、ネギを見る。その真剣な眼差しは、関東魔法協会のトップであることの証明でもあった。

「ネギ君。この修行はおそらく大変じゃぞ？ダメだったら国へ帰らねばならん……二度とチャンスはないが、その覚悟はあるのじゃな？」

「は、はいっ！やります。やらせてください」

ネギは若干緊張しながらではあるが、大きな声で、ハッキリと返事をした。その瞳には自らの目指す夢、或いは目標に対する覚悟のよいうなものが見えた。

「……うむ、分かった！では早速今日からやってもらおうかの。君の補佐する人物と指導教員を紹介しよう。しずな君」

「はい」

学園長室に入ってきたのは源しずな。男女問わず、生徒に人気のあ
る教師だ。

「はじめまして、ネギ先生。指導教員のしずなですよろしくね」

「あ、……はい」

挨拶が終わるのを見計らって、学園長が口を開く。

「そうそうすまんがこのか、アスナちゃん。しばらくはネギ君を君達の部屋に泊めてもらえんかの？彼はまだ住む所が決まっとらん
のじゃよ」

「げ」

「え、」

何故か濁点付きの言葉を発する二人。木乃香はええよ、と呑気な声で返事をしている。

「このか、アスナは何であんなに嫌がってんだ？」

白銀は先ほどからずっと疑問に思っていたことを木乃香に尋ねた。確かに、ネギのような子供が担任教師になるのだから、不安になるのも仕方のないことなのかもしれないが、それだけであそこまで毛嫌いするような理由にはならないからだ。

「実はな、ネギ君が『失恋の相がでてますよ』って言うたんや。それにアスナは高畑先生のことが好きやから、高畑先生が担任やなくなるんが嫌なんやと思うえ」

「なるほど、それは怒りもするわな。……それにしても、アスナは年上の男が好きなんだな。まさかタカミチとはなあ……」

高畑・T・タカミチは麻帆良の広域指導員で、魔法先生でもある。通称『デスメガネ』。

（詳しくは覚えてないが、確かタカミチは30歳くらいだったか？かなり年が離れているな。……まあ、年の差云々の前に教師と生徒という障害があるけどな）

白銀は恋愛というものは経験したことはないが、誰が誰を好きになろうと構わないと思っている。勿論、法律に抵触しない限りは、だ。未だに抗議している明日菜も、学園長には頭が上がないのか、仲

良くしなさいという言葉に大人しくなる。

「では話はこれまでじゃ。このかと明日菜ちゃんは先に教室に行つてええぞい。しずな君は外で待つとってもらえるかの？ネギ君と白銀君にもう少し話があるでの」

しずなはわかりましたと頭を下げ、木乃香は白銀にほななくと手を振り、明日菜はふんっ！と鼻を鳴らしてから退出した。それを見届けてから、学園長は話を続けた。

「ネギ君、そこにいる白銀君はこちら側の住人じゃ。何かわからないことがあつたらいろいろと教えてもらおうとええ」

「そ、そうなんですか!？」

随分と驚いた顔で白銀を見るネギ。

「ああ。俺の名前は立花白銀。魔法のことについてはネギの方が詳しいと思うが……、まあ何か困つたことがあつたら言ってくれ。出来る限り力になるから」

「は、はい！よろしくお願いします!」

ネギの嬉しそうな様子を見て、白銀は俺に弟がいたらこんな感じなのか？と思つた。

「では話はこれで終わりじゃ。ネギ君はこれからさっそく授業じゃが、しっかり頑張るんじゃぞ」

ネギは元気良くはい！と答えて部屋から出ていった。

「白銀君、どうじゃ？ネギ君を見た感想は」

学園長の質問に白銀はそうだなあ……、と少し考えてから答えた。

「素直ない子だと思う。それに、ネギからは目標へ突き進む強い意思を感じた。ネギならきつと良い教師になれると思う。……勿論、“立派な魔法使い”にもな」

学園長は白銀の答えに満足気に頷いた。

「わしもそう思う。……白銀君、これからは出来るだけネギ君のことを気にかけてくれんかの」

「やれるだけのことはやるさ。……ただ、俺は基本的には何もしない。……ま、ネギが助けを求めてきたら、アドバイスくらいはしてやるけどな」

白銀はそう言って微笑んだ。

2時間目ー授業は真面目に聴くものだ

学園長室で昨晚の報告とネギとの顔合わせも終わらせた白銀は、男子高等部、二一Aの教室前まで来ていた。

ついさっき、一時間目の授業の終わりと休憩時間の始まりを告げるチャイムが鳴り響いたばかりだが、授業から解放された男子生徒たちは、水を得た魚の如くはしゃぎ回っている。

そんなクラスメイトたちを見た白銀は、相変わらず騒がしいヤツらだなと思った。

（この後、数学の小テストがあるの忘れてんのかね…）

後はとづくに諦めているか、もしくはよほど自信があるかだが……、恐らく前者の者がほとんどで、後者の者はごく一部の成績優秀な生徒のみだろう。かくいう白銀もそのごく一部の成績優秀な生徒ではあるのだが……。

いつまでも教室のドアの前にいるわけにはいかないので、白銀はドア開いて入室する。

すると、そんな白銀の姿に気付いた数人の生徒が近寄ってきた。

「おい立花、重役出勤とはいいいご身分じゃないか」

白銀に話しかけてきたのは、黒いフレームの眼鏡をかけた、くつくつくと喉を鳴らしながら笑う少年だった。

「文句なら爺さ………学園長に言え」

「そいつは失敬。……しかし、学園長のことを爺さんと言いかけるのは止めておいた方がいい。仮にもこの学園のトップなのだからな」

この独特な話し方をする少年の名は榊原サカキ（さかきばらサカキ）。

二一Aの委員長を務めており、テストでは常に上位に食い込むという秀才ぶりを発揮している。

「しょうがないだろ。学園長は俺の身元引受人なんだから」

白銀に家族は居ない。五年前に死別したからだ。その当時の話をすることもあるだろうが、ここでは割愛させていただく。

「そういやそうだったな。シロガネにとって学園長は家族みたいなモンなんだし、あんまかてえーこと言うなよサカキ！」

サカキのことを呼び捨てにした少年の名は倉沢宗二。くらさわそうじ

成績は中の下と芳しくないが…、運動能力は抜群。サッカー部のエースで、このクラス唯一の彼女持ち。

クラスの男子からは裏切り者と称され、宗二が彼女の話をした時には嫉妬した男子生徒による暴動が起きる。…これは余談だが、それを鎮圧するのは白銀と刀子の仕事だったりする。

「くっく、そのことは僕も理解しているがね。これも性分なんだ。許せ」

サカキは宗二の言葉に苦笑しつつ、白銀に謝罪する。

「ああ、俺は大して気にしていないから謝る必要はないさ」

「謝罪の言葉と感謝の言葉は素直に受け取れ。相手に失礼だからな」

「サカキが謝ってる側なのにエラそうに説教すんなよ」

「説教ではない。対人関係を円滑にする為のアドバイスだ。助言と言ってもいい」

サカキと宗二が言い争っている。これは別に珍しいことじゃない。この二人はいつもこんな調子なのだ。

勿論、二人とも本気で言っているわけではない。この口喧嘩とも言えるそれは、一種のお遊びのようなもので、お互いに楽しんでいるのだ。

「二人とも、仲が良いのは良かったからさっさと席に付け。次、小テストだろ？サカキはともかく、宗二は勉強しないと危ないだろ」

「大丈夫だ。昨日サカキに教えてもらったからな！」

サカキと宗二はルームメイトでもあり、勉強を教えってもらうこともあるそうだ。

「なら安心だな」

「そういうシロガネの方ことどうなんだよ」

「俺はいつも通りだ」

「立花のいつも通りは信用出来ないがな」

「うるさい」

白銀は余り勉強をしていない。授業を真面目に聴いても、寮で勉強

はしない。

というのも、空いた時間は魔法の修業や鍛練に充てているので、勉強をする暇がないからだ。夜は警備の仕事がなければ暇だが、その場合趣味のゲームをするので意味がない。

「まあ大丈夫だろ。問題無い」

「シロガネは勉強しないクセに成績良いから納得出来ねえ」

宗二が白銀を恨みがましい視線を送っていると、数学教師がやってきたので三人とも席についた。

因みに、小テストの結果はというと、サカキが10点満点、白銀は8点、宗二は7点だった。

放課後、授業から解放された生徒たちで麻帆良学園はうめつくされる。

ある者は部活に励み、またある者は、友人とともに寄り道をして笑い合いながら帰っていく。

そんな、平和な日常を謳歌している学生たちがいるなか、白銀は一人、世界樹と呼ばれる大木の前に来ていた。

「まったく……。昨日襲撃したばっかだったのでにまた来たのかよ……。それも、まだ日も落ちてないってのに……」

白銀は世界樹を眺めながら、愚痴をこぼす。

「麻帆良に侵入する奴らはよっぽど暇を持て余してるんだな。……
…なあ、アンタもそう思うだろう？」

白銀は誰かに同意を求めた。まるで、そこにもう一人誰かがいるかのように……………。

「…………まさか、私の気配に気付くとはね」

そこで低い男の声が世界樹の広場に響いた。男はまるで最初からそこに居たかの如く、白銀の眼前に現われた。

「やっと姿を現したか。麻帆良の学園結界ナメんな。侵入者の居場所なんざすぐわかる」

「そうは言うがね。此所には君しか居ないじゃないか…………」

そう、確かにここには白銀と侵入者の男以外誰も居ない。
他の魔法先生や生徒はどうしたのだろうか？

「そんなの決まってるだろ。お前の相手は俺一人で充分だと判断したからだ」

「……………ほう」

白銀の挑発ともとれる台詞に、男はどこか感心したような息を漏らした。

「ここは『随分と甘くみられたものだ。この私相手に君一人で充分とはな』のようなバトル物の台詞を言うべき場面なのかな？」

「知るか。俺に訊くな」

白銀の懺然とした表情を見て、男は笑みを浮かべる。

「いやすまないね。最近私の息子がそういう漫画を読んでいてね。
………ついついハマッてしまったよ」

「ってアンタがハマッてんのかよ!？」

「ああ、この間も『父さん、前に貸したド○ゴン○ール返してよ!』
と怒られてしまった」

「漫画借りてんの!？しかも借りパクかよ!？イヤな親父だなアン
タ！」

「あれは私が悪いのではない。………フ○ーザ戦を長引かせる作者
が悪いのだ！」

「作者の所為にしちゃった!？」

「因みに、ク○ラの最終形態が一番好きだ」

「アンタの好みなんか知るかっ!？」

完全に男のペースに乘せられてしまった白銀。挑発して自分のペー
スに持っていきたかったのに、その目論みは見事に失敗してしまっ
た。

「隙有りだな。少年」

「へ？」

男の目の前の空間に17の氷の矢が現われ、白銀へ目掛けて飛来する。

「っ！？魔法の射手！？無詠唱か！」

白銀は不意を打たれたことに舌打ちしたい衝動に駆られたが、今はそんなことをする一瞬でさえ惜しく感じる。

詠唱する時間がない。一応無詠唱で魔法の射手を放つことは出来るが、今の白銀では12本が限界だ。なら、避けるしかない。

白銀は自らの身体を気で強化し、全力で右に飛ぶことで飛来する17の氷の矢を回避する。

「ふむ……。スピードは君の方が上のようなが、手数は私の方が上のような。上を見たまえ」

白銀は男に言われた通り上を見た。いや……。例え言われなかったとしても見ていただろう。何故なら、上空から濃い魔力を感じたからだ。

そこには、100を超える魔法の射手が浮かんでいた。水属性な為、たくさんの氷柱のようにも見えた。

「少年、チェックメイトだ」

男が勝利宣言をした次の瞬間、魔法の射手が白銀目掛けて雨のように降り注いだ。

白銀が侵入者と戦闘を繰り返している中、女子中等部の二一Aの教室では、新しく担任になったネギの歓迎会が行われていた。

「あのー…、ネギせんせい……」

教室の中心で生徒に囲まれているネギの下へ、前髪で顔を隠すような髪形をした気弱そうな少女が歩み寄る。

「え……、あ、27番の図書委員宮崎のどかさん」

「あのー、さっきはそのー、危ないところを助けていただいて、そのー、あのー……」

気弱そうな少女、のどかは、たくさんの本を積み上げて運んでいる時に、階段から転落しそうになったところをネギに助けられたのだ。しかし、その際に魔法を使ったところを明日菜に見られてしまったのだから……。

のどかは、頬を朱に染め、意を決したように手に力を込め、おずおずと両手を突き出す。

「これはお礼ですー。図書券……」

「えっ!?!?」

「本屋がもう先生にアタックしてるぞー」

誰が言ったのかは分からないが、その声にクラスの大半の生徒が二人を見て、あちこちから野次が飛ぶ。

「違いますー、それに私本屋じゃないですー」

のどかは慌てて異を唱え、生徒たちは笑い声を上げる。

そんな賑やかな、悪く言えば騒がしいとも言える喧騒の中、このクラスの元担任のタカミチは壁際でトマトジュースを飲んでいる金髪の少女に声をかけた。

「エヴァ、気付いてるかい？」

「ああ、これほどの魔力だ。気付かない方がどうかしている」

彼女の名はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。真祖の吸血鬼にして、元600万ドルの賞金首だ。

もったも、今は単なる幼女でしかないわけだが……。

「誰が幼女だ!!」

「エ、エヴァ？」

「いや、すまん。なんだか言わなくてはいけない気がしたから……」

「そ、そうなんだ……」

突然叫んだエヴァに何か言おうと思ったが、深く追求すれば墓穴を掘ってしまう気がしたタカミチは軽く流すことにした。

「で、だ。侵入者のことだったな。ジジイが私に行かなくてもいい

と言ってきたが……、今戦闘しているのは誰だ？」

「白銀君だよ」

「ほう。あいつか……。よく戦う気になったな、奴は」

「うん、僕もそう思うよ。何でも、久し振りに本気で戦ってみたいらしいよ」

エヴァはその言葉に目を丸くする。

「本当に珍しいな。奴は面倒は嫌いだと言っていたのだがな……」

「なんだかんだ言っても、白銀君も戦士だからね。この間、僕と一緒に鍛練してた時も言ってたよ。最近身体が鈍ってしょうがないってね」

白銀に降り注ぐ無数の魔法の射手。白銀はその猛威に晒されていた。

「左手に魔力、右手に気……。合成！ “咸卦法”」

究極技法の一つ “咸卦法”

それは本来ならば反発しあう気と魔力を融合させる技術である。

（タカミチに教わったこの咸卦法……。実戦でどれだけ使えるか確

かめてみるか)

瞬動を用いて魔法の射手避け、或いは弾きながら男との距離を詰める。しかし、白銀の咸卦法の持続時間は短い。男との距離が10メートルあるかないかの地点で時間切れとなった。

「まさか、咸卦法を修得しているとは思わなかったぞ、少年。だが、持続時間が短いのが敗因だったな」

「そんな余裕ぶっこいてていいのか？」

白銀は手をズボンのポケットに納める。

「ん？何をしている？」

「見りゃわかる」

白銀がそう言った次の瞬間、白銀に命中する筈だった魔法の射手が何かに当たる音とともに消え去った。

「なに！？」

「こんなもん、まだ序の口だぜ？」

魔法の射手が二つ三つ消えた後、今度は男が吹き飛んだ。

「がふっ！？」

腹に溜まっていた空気が口から噴き出す。

（くっ！何だ今の攻撃は！？突然腹部を殴られたような衝撃が……、まさか不可視の攻撃か！？）

男を襲う不可視の攻撃、それはタカミチ直伝の“居合い拳”だった。ポケットを鞆に見立てて拳圧を飛ばす技だ。

「どうした？魔法の射手が飛んでこなくなったぞ？もう品切れか？」

「くっ……！ならば、これならどうだ……！」

男は詠唱を始める。それを見た白銀は、ただズボンのポケットに手を入れるだけで何もしない。その目が語っている。殺れるもんなら殺ってみろ、と。

（馬鹿め！あれが何かは分からぬが、あの程度の威力ならばこれは相殺出来ん……！）

「行くぞ、少年！……“闇の吹雪”」

その名の通り、闇を纏った吹雪が白銀を襲う。その威力は、白銀の魔力障壁など容易く打ち破るだろう。

「やっぱり、前にエヴァが使ってた魔法だったか……」

この魔法は、タカミチと一緒にエヴァの『別荘』で鍛練している際に、エヴァがタカミチに使った魔法だ。その威力は白銀自身、よく理解しているつもりだ。

「“氷楯”」

氷の盾が白銀の目の前に現われた。これもエヴァの魔法だ。

「馬鹿め！そんなモノで私の魔法は防げんぞ！！」

男の言う通り、氷の盾は数秒も経たぬ内に碎け散った。

勝った！男は氷の盾が掻き消えるのと同時に勝利を確信した。

あの魔法は男の使える魔法の中で一番の威力を誇る。その魔法を喰らったのだ、生きている筈がない。もし、生きていたとしてもかなりの重傷を負っていることだろう。

男としては、子供を殺すという行為には良心が痛むので、生きていてほしいとは思っている。

闇の吹雪の影響で、白銀の立っていた場所は、土煙によって一時的に見えずらくなっていた。

（許せ少年。仕事に私情は挟めんだ）

男はあの土煙の向こうに横たわっている白銀の姿を幻視していた。だからだろうか、背後から忍び寄る人間の気配に気付かなかったのは……。

「チェックメイトだ」

「な!?!」

突然背後から聞こえてきた、聞き覚えのある声を最後に、男は意識を失った。

「ふう……。意外と弱かったな」

白銀は侵入者の男が、予想していたよりも弱かったことに落胆した。

（はぁ……。居合い拳と咸卦法しか試せなかった。まだ豪殺居合い拳使っていないのに……）

白銀は闇の吹雪を防ぐ為に氷楯を使ったのではない。あれは飽くまで目眩まし、自分の体を覆い隠す為のものだったのだ。

氷楯で全身を隠した白銀は、闇の吹雪が氷楯を破壊する瞬間に、瞬動で男の死角に移動したのだ。

闇の吹雪で視界が悪くなったこともこの作戦が成功した一因となった。

（さっさと爺さんに報告して帰るか……。後始末は向こうで覗き見してる神多羅木先生に任せることにしよう）

念話で神多羅木にそう告げて、報告の為に学園長室に向かう白銀であった。

3時間目 二三話も使って一日が終わらない不思議

白銀が学園長室に訪れるのは本日二度目。学園長が執務を行なっているところだった。

「ご苦労じゃったな、白銀君。それで、侵入者はどうなったかの？」

「侵入者は中年の男で、人種は多分イギリス人。関西呪術協会との関わりは不明だ。尋問は遠くから覗き見してた神多羅木先生に任せであるから後で確認しといてくれ」

「うむ。……ところでどの程度の実力を持っておったのかの？」

「魔法の射手を無詠唱で17出してたし、それなりの実力は持ってたな。気配の消し方は一流だったが、戦闘に関しては二流がいいところ」

白銀の辛口評価に学園長は苦笑する。

（白銀君の言う通りならば、高音君と愛衣君でも対処出来る程度の実力と判断してもよさそうじゃな）

学園長はある魔法生徒の二人組を思い浮かべ、また高音君たちと白銀君を組ませるのも面白いかもしれないと思った。

「そんじゃ俺帰るわ。悪かったな、仕事中断させて」

「ふおっふおっふお。白銀君が気にする必要はないぞい。それに、これも仕事じゃからの」

学園長は白銀の気遣いに頬を緩める。こういう細かい気配りが出来る優しいところを学園長は気に入っている。

（このかも白銀君のことを好いておることじゃし、白銀君がこのかを嫁に貰ってくれると良いんじゃないかのお……）

学園長は退室する白銀の背中を見ながら、どうすれば白銀が木乃香と付き合う気になるか、思案するのであった。

学園長室から退出した白銀は、偶然にもネギとその生徒たちと遭遇した。

「あ、しろくんや」

「白銀さん！こんにちは！」

「しろがねじゃない、何でここにいのよ？」

「よう、このか、ネギ、アスナ」

白銀は顔見知りの三人と挨拶を交わす。

「ちょっと、私の質問に答えなさいよ！」

しかし、明日菜は自分の疑問を無視されたのが気に食わないのか、白銀に詰め寄る。

「はぁ……。アスナ、俺が今、何処から出て来たのか考えればすぐわかるだろ」

言われ、明日菜は白銀の出て来た扉を見る。そこには、『学園長室』と書かれてあった。

「あ……。学園長先生に用があったんだ」

「分かったならその手を離せ」

「へ？……………あ、ごめん」

いつの間にか白銀の胸ぐらを掴んでいた明日菜は、慌てて手を離し、謝罪した。

「いいよ、別に。アスナの性格は何となく分かったから」

「……………なんだかバカにされてる気がするわ」

「気の所為だろ」

白銀は今朝初めて会ったばかりの明日菜の性格を何となく理解していた。そう、口よりも先に手が出るタイプであると……。

「明日菜さん。そちらの方とはお知り合いなのですか？……………どうやら男性のようですが……」

「おいちょっと待て、何だその言い方は！それじゃまるで、俺のことを男か女か判らないって言ってる風に聞こえるぞ！」

白銀のことを知らない生徒が明日菜に誰なのか訊くが、その男か女か判断がつかない、と言っているような物言いに、白銀はつい口を挟んでしまった。

「俺は立花白銀、“男子”高等部に通う二年生だ」

白銀は“男子”の部分を強調する。男子生徒の制服を着ているのに、女かもと疑われたのだから無理もないのかもしれないが……。

「…………男の子なのにあの肌のハリと白さは卑怯よ」

などと、何人かはうなだれているが、白銀はそれを意図的に無視する。

少し不機嫌になった白銀に木乃香が話しかける。

「なあしろくん。これから何か用事とかあるん？」

「いや、無いけど……」

突然の質問に少し困惑しながら答える白銀。

「あんな、うちらネギ君の歓迎会やっとなるんよ。ほんでな、よかつたらしろくんも一緒に歓迎会せえへん？」

「歓迎会、ねえ……………」

（歓迎会って俺関係……………は一応あるのか。でも俺以外に男はタカ

ミチとネギしかいないだろうし……、どうするべきか……)

二一Aには白銀の知り合いが何人かいるが、それでも女生徒しか居ない場所に行くのは気が引けた。

「あー……誘ってくれるのは嬉しいけど、遠慮しとく」

「そっかー……。残念やなー……。…」

本当に残念そうに言う木乃香に、罪悪感が芽生えた。

「まあ、これに懲りずにまた何かあったら誘ってくれ」

白銀はそう言って木乃香の頭を優しく撫でる。

「むー、子ども扱いせんとしてよー」

と、むくれる木乃香に悪い悪いと、あまり反省していない声音で謝った。

「んじゃ、俺は帰るわ。じゃあな、三人とも」

白銀は三人に別れを告げ、その場を後にした。

白銀が立ち去った後、ネギたちは教室に戻ろうとしたが、突然ネギ

があ！と叫び声をあげた。

「どうしたのよネギ」

訝しげに問う明日菜に、ネギは少々慌てたように答える。

「す、すみません。僕、ちょっと白銀さんに用事があって……、すぐ戻りますから皆さんは先に行行って下さい」

ネギは急いで白銀の後を追った。

「白銀さーん！」

急いで追いかけたので、白銀に追い付くのにそれほど時間はかからなかった。

「どうしたんだ？ネギ。俺に何か用か？」

「じ、実はですね」

ネギは大きく深呼吸してから言った。

「あ、アスナさんに魔法がバレちゃったんです！ど、どうしましやう………」

その時のことを思い出したのか、涙ぐむネギ。その手の趣味の方には堪らないが、そんな奇特な趣味を持ち得ない白銀には効果はない。しかし、ネギの言った『アスナさんに魔法がバレちゃったんです』という言葉は白銀の頭をフリーズさせるには十分な威力を持っていた。

「……………マジで？」

「は、はい……………」

嘘だと言ってほしい。そんな万感の想いを込めて言ったのだが、無情にも切り捨てられてしまった。

（まさか初日にバレるとはな……………。そりゃいずれバレると思ってたが、これはいくらなんでも早過ぎるだろ！？）

白銀はネギが魔法使いだとバレるのは時間の問題だとは思っていたが、こんなに早くバレるとは思ってもみなかった。

「一応訊いとくが…………、何でバレたんだ？」

「じ、実は……………」

ネギは放課後になってから起こった出来事を説明した。説明を聞き終えた白銀は、なるほどと小さく呟いた。

「や、やっぱり、ぼ、僕はオコジョにされちゃうんでしょうか!？」

涙目で白銀を見上げるネギ。それは白銀でさえぐつとくる仕草だった。

「アスナは黙っててくれるって言ってたんだろ？なら大丈夫だろ」

多分と付け加えるそうになるが、それをネギに言えば、泣かせてしまいかもしれないのでその言葉は胸中に押さえ込む。

「ほ、ほんとですか!？」

「ああ、それにネギは生徒を助ける為に魔法を使っただろ？なら仕方ないさ」

白銀はネギを安心させる為に意識して笑みを浮かべる。

「し、白銀さん……。あ、ありがとうございます!」

「じゃあ、次からは気をつけろよ」

そう言って、白銀はその場を立ち去るのだった。

次に白銀が向かった場所は、学生寮に向かう途中にあるスーパーだった。

「今日は何を食おうか……」

数々の食材を前に悩む白銀。

（昨日はカレーだったっけ……。残りは明日の朝食食べることにしよ

う。今日は別のもの食べたいし)

白銀の寮室にルームメイトは居ない。よって、自炊するか、ファミレスなどで外食するか、寮の食堂を利用するか、三択しかないのだ。もしルームメイトがいたら、食事を作らせるといふ選択肢もあるのだが…………。

(お！今日は豚肉が安いな。…………よし！今日はトンカツにしよう！)

作る料理が決まれば後は早い。次々とカゴの中に必要な食材を入れていく。

(トンカツだけじゃ栄養が偏るし、サラダも欲しいところだな)

白銀は基本的に面倒なことは嫌いだ、料理を作るのは嫌いではない。しかし、毎日作る気力はないので寮の食堂を利用するのも少なくはない。

(飲み物は……前に爺さんがくれた緑茶が残ってるから別にいいか)
食材を買い揃えた白銀は、レジに向かう。すると、そこには見慣れた人物がいた。

「あ、白銀さん」

「愛衣？何でここに？」

そこにいたのは佐倉愛衣。白銀と同じ魔法生徒で、侵入者の撃退の仕事を一緒にしたこともある。

「愛衣も料理するのか？」

「私も女ですから、料理くらいしますよ」

「何作るんだ？」

「今日は豚肉が安かったのでトンカツを作ろうと思ってます。白銀さんは？」

「俺も愛衣と同じ物作ろうと思ってな」

「奇遇ですね」

「そうだな」

二人して笑い合う。だが、そんな二人を見る周りの客たちとは言う
と……………

（なにが『奇遇ですね』だ。なにが『そうだな』だ。そして笑い合
ってんじゃねえよこのクソガキがっ！！）

（氏ね！リア充は氏ね！！）

などと思ったりする。

「？」

「白銀さん、どうかしたんですか？」

「ああいや、何か不穏な気配がしたけど、気の所為だったみたいだ」

「そうですか。……そういえば、今日も侵入者と戦ったんですよね？」

「ん？ああ、そうだな」

白銀は夕方襲ってきた侵入者の男を思い出す。しかし、ドラ○ン○ールが好きな中年男という印象が強く、どんな顔をしていたのかは思い出せなかった。

「それがどうかしたのか？」

「いえ……、ただ、私でも倒せるのかなって思っただけで……」

「まあ確かに、自分がどの程度の実力を持ってるのかは知っておきたいもんな」

「別にそういうわけじゃないんですけど……」

「ん？何か言ったか？」

「い、いえ、何でもないです！」

「？そうか？ならいいけど」

愛衣としては、自分も早く強くなって、白銀を手伝いたかっただけなのだが……、それが相手に伝わらないのはお約束である。

「愛衣と高音なら、あいつくらいは倒せる筈だ」

「そ、そうなんですか？」

「ああ、高音の影であいつの放つ大量の魔法の射手を防ぎきり、あいつの“闇の吹雪”を愛衣の“紅き焰”で相殺して、無防備になったところを叩けば終わりだ」

「お姉さまがいないと勝てないんですね……」

愛衣がお姉さまと慕う高音・D・グッドマンと二人がかりでなければ勝てないと言われ、若干気落ちする愛衣。

「それはしょうがないさ。愛衣はまだ実戦経験が少ないんだし」

「分かってはいるんですけどね。感情は納得してくれないんです……」

「気にするな。愛衣には才能があるし、後何年か経てば、一人でも上級悪魔と渡り合えるようになるさ」

「そ、それはちょっと……」

上級悪魔と自分一人だけで戦うという場面を想像し、愛衣は引きつった笑みを浮かべる。

どんなに強くなったとしても、一人で上級悪魔と戦いたくはないのだ。

一般人が幽霊を恐がるのと同じで、愛衣も人外存在と戦うのは恐いのだ。そこは普通の女の子と変わらない。

「愛衣、ここで話してもアレだし、さっさと会計済ませるぞ」

「そうですね」

二人はレジに向かった。

レジで会計を済ませた二人は、すっかり暗くなった夜道を歩いていた。

「それにしても、いっぱい買ったんですね」

「そうか？そんなに多くないだろ」

愛衣の言う通り、白銀の買い物袋にはたくさんの食材が詰め込まれていた。少なく見積もっても六人分はある。

「白銀さんは普段どれくらいの量のご飯を食べてるんですか？」

「食べる時間帯にもよるけど……、朝二食、昼三食、夜三食ってところか」

「…………二食って、二人前ってことですか？」

「まあそうだな」

愛衣は目を見開いて驚いた。一日でそれだけの量を食べるということだけでも充分過ぎるが……、何故、この体型を維持出来るのかの

方が、女性である愛衣を驚かせた。

「あ、有り得ません！何で白銀さんはそれだけ食べて太らないんですか！？」

「……………毎日鍛練したり、戦ったりしてるからじゃないのか？」

白銀は純粹にそう思っているのだが、そんな理由で納得出来る女性はこの世にはいないだろう。

「人体の神秘です……………」

「なんだよソレ……………」

白銀は若干呆れ気味だが、愛衣の反応は正しいものである。それが恋に悩む少女であれば尚更だ。

「そんなことより、愛衣は料理始めて長いのか？」

「そ、そんなことって……………まあ良いですけど……………」

大多数の女性の悩みを、そんなこと呼ばわりされるのに憤りを感じないでもないが、白銀の質問に答える。

「そうですねー……………小さい頃からお母さんがご飯を作る時に手伝ってはいたんですけど、一人で全部作るようになったのは、麻帆良に来てからですな」

「小さい頃から手伝ってたのか……………、愛衣は偉いな」

「い、いえ、そんなことないです!」

白銀は愛衣の頭を優しく撫でる。すると、愛衣の頬が朱に染まり、瞬く間に顔全体が真っ赤になった。

「どうしたんだ? 顔が赤いぞ?」

「い、いえ! 何でもないです! わ、私、こっちなんで!」

愛衣は赤くなったのを誤魔化す為にその場から走り去った。

「? なんだったんだ?」

白銀は慌てて走り去る愛衣の後ろ姿に首を傾げるのであった。

4時間目 一俺の日常には厄介事がつきものらしい……（前書き）

自分でもなんだかよく分からない内に書いてしまった……。

取りあえず主人公の始動キーを出してみました。

何か指摘があったらよろしくお願いします。

4時間目 一俺の日常には厄介事がつきものらしい……

白銀の朝は早い。まだ日も出ていない時間に起床する。

顔を洗い、普段着を着用した白銀は、台所に向かう。そこで朝食の下拵えを行なう。

昨日研いだ米を入れてある炊飯器の前に立ち、七時ピッタリに炊き上がるようにセットしてあるかどうか確かめる。

次に冷蔵庫を開き、おかずにする食材を探す。

（昨日買った鮭がまだ残ってるな。おかずはこれでいいとして、後は味噌汁の用意か……。確かここに……。あつた！）

白銀は一週間程前に学園長から貰った味噌が残ってるのを確認する。

（これでよし！ そんじゃ今日も朝の鍛練に行くのでしょうか）

白銀はいつも麻帆良の郊外にある森の中で鍛練を行なっている。

人払いと認識阻害の結界を張り巡らせ、一般人が迷い込まない環境を作り上げる。

「左手に魔力、右手に気……」

どうやら今日は咸卦法の持続時間を伸ばす訓練をするようだ。

（保って一分つてとこか……。実戦で使うには短過ぎる。せめて三分は出来ないという意味ないな）

白銀には才能がある。普通、咸卦法を成功させる為には年単位での修業が必要だ。それを白銀は、僅か一ヶ月で成功させたのだ。

これは驚異的な早さだ。指導してくれたタカミチに、これじゃ僕の立つ瀬がないねと苦笑させてしまった。

「ふう……………、刹那か」

「流石ですね。気配は消した筈ですが、もうお気付きになられるとは……」

白銀の背後から現われたのは、黒い髪を邪魔にならないように横に結ってある生真面目そうな少女だった。

少女の名は桜咲刹那。京都神鳴流の使い手で、木乃香の護衛を務めている。

「まあ、年下の女の子に負ける訳にはいかないからな。これくらいは当然だ。……だが、刹那も成長したな。俺が神経張り巡らせてるのに十メートルまで近付くとはな」

「それは白銀さんが異常なだけです」

白銀は時々刹那と鍛練をすることがある。その時は自分の気配を消して、白銀に気付かれないように近付くというのが、刹那の日課となっていた。

最初は三十メートルで気付かれていたので格段の進歩と言えるだろう。

「では、いきます！」

刹那は肩にかけてあった竹刀袋から野太刀を取り出す。

木乃香の父親、近衛詠春から譲り受けた名刀『夕風』がようやく顔を出した太陽の陽を反射する。

「こい！刹那！」

刹那は気で自らの肉体を強化し、白銀へ切りかかる。

「甘いぞ刹那」

白銀は夕風の腹を叩き、軌道を逸す。更にもう一方の手で腹部に一撃を加えようとするが、刹那も読んでいたのか、後方に飛び退くことでそれを躲す。

「そこは俺の間合いだ」

しかし、そこに白銀の居合い拳が刹那を襲う。

「くっ……！」

刹那は防ごうとするも、何発かは喰らってしまふ。

「魔法の射手、連弾、雷の17矢！」

「斬空閃！」

白銀の魔法と刹那の斬撃がぶつかり打ち消し合う。

白銀は次の攻撃の為に詠唱を開始する。

「トウス・クル・ケ・ルトウス・ストウルティウス！氷の精霊38頭、集い来たりて敵を切り裂け！“魔法の射手・連弾・氷の38矢”！！！」

「神鳴流奥義！百烈桜華斬！！」

目に見えぬ程の剣速から放たれる無数の斬撃。

白銀の放った氷の矢は細切れにされ、きらきりと輝きながら舞い落ちる。

「やるな刹那」

「いえ、まだまだです。白銀さんが本気になれば、この程度では済まないでしょう？」

「何言ってるんだよ。俺は高威力の魔法を使ってないだけで、本気を出してないわけじゃない」

白銀が刹那との鍛練で使用する魔法は“闇の吹雪”や“雷の暴風”くらいだ。それ以上の威力の魔法を使用すれば、刹那が死んでしまう可能性がある。

「だいたい、俺が高威力の魔法使ったら後片づけが大変だろうが」

「そ、それもそうですね」

白銀が“おわるせかい”や“千の雷”級の魔法を使用すれば、最悪、地形が変わる。その場面を想像したのか、冷や汗を出す刹那。

「じゃあ、仕切り直しだ」

結局、白銀と刹那は六時半になるまで鍛練を続けた。

刹那との鍛練を終えた白銀は、朝食の仕上げに取り掛かっていた。

（よし、鮭は焼き上がったな。味噌汁も良い感じだ）

こんがりと焼かれた鮭と味噌の香りが立ち上ぼる味噌汁、そして炊き上がった熱々の白米……、これぞ正に日本の朝ご飯。
湯飲みに緑茶を注ぐ。

「出来た！完璧だな」

白銀はうんうんと満足気に頷き、いただきますと食材に感謝しつつ、白銀は朝食を食べ始めた。

朝食を食べ終えた白銀は男子高等部の二一Aの教室にいた。

白銀の席を前から三列目、窓際の席だ。白銀は窓から見える景色を眺めながら、刹那との会話を思い出す。

（しかし、ネギも大分この学園に慣れてきたみたいだな。刹那の話じゃ生徒からも信頼されてるみたいだし）

白銀は刹那に、ネギの授業風景や、ネギの周りで起こった出来事を

を教えてほしいと頼んでいたのだ。

（余りある魔力がくしゃみで暴走して武装解除が発動するのは問題だが、被害は主にアスナしか受けてないし、今のところは問題ないだろう）

ネギは父親譲りの膨大な魔力を持っている。だが、ネギはまだ幼く、未熟なのでその魔力を完全に制御出来ていない。

この問題はネギが成長すれば解決するので、白銀は特に問題はないと判断した。

（それにしても、聖ウルスラの奴等がちょっかい出してくるとはなあ…）

二一A女子と聖ウルスラの女生徒のドッジボール対決のことも白銀の耳に入っていた。

（ホント、麻帆良にはお気楽な連中が多いな。正直羨ましいぜ……ってこの世界に自分から入り込んだ奴の台詞じゃないな）

白銀は自嘲的な笑みを浮かべる。自ら進んで裏の人間になったのだ。今さら一般人を羨んでも意味がない。

「もうすぐ三月か……、月日が流れるのは早いもんだ」

「何を年寄りのようなことを言っている」

白銀の独り言に反応したのはサカキだった。

サカキはざり落ちたわけでもないのに眼鏡を上げる動作をする。

「立花、お前は未だ十代の若者だ。縁側で茶を啜りながら隠居生活を送っている老人の様な台詞を吐くな」

「随分長いツツコミだな、サカキ。後、サカキの話し方も十代の学生がするもんじゃない」

「癖だからな。こればかりはどうしようもないさ」

「サカキは昔からその話し方だもんな！むしろサカキが普通の口調で話す方が違和感あるしな！」

「それは同感だな。……ところで宗二、いつからそこに居たんだ？」

「最初から居ただろ！？気付いてた癖に嘘付くんじゃねえー！！」

「なに！？最初からだと？馬鹿な！？この僕が宗二の気配に気付かないなんて有り得ない……」

「お前も何言ってやがる！今日一緒に学校に来ただろ！？しかも、最初から俺の方見てただろうが！」

「何のことだ？夢でも見ていたのではないか？勘違いで怒鳴るとはな。まったく、これだから宗二は……」

「謝れ！俺を含む全世界の『そうじ』という名前の人に謝れー！ー！……」

宗二の叫び声が教室に響き渡る。
白銀はそんな普段通りの二人を見て、こんな日常も悪くないなと思

ったのだった。

本日最後の授業も終わり、滞りなく帰りのHRも終えた二-Aの男子生徒たちは、がやがやと騒ぎながら帰路につく。

部活にも参加しておらず、裏の仕事も入っていない白銀もスーパーで買い物でもしようかと思っていたのだが……、どうやら白銀は厄介事に巻き込まれる運命にあるらしい……。

「何故だ………」

白銀の向かおうとしたスーパーでは今、『お客様大感謝デー!! 卵1パック78円』というタイムセールスを行なっている。

早く行かなければ売り切れてしまう。そんな想いでタイムセールスが始まるギリギリの時間にやってきたのに……。

「なあいいだろ? オレたちといいことしようぜ?」

「そうそう、ゼツテエー後悔させねえからよお」

「イヤよ! 私たちはこれから行くところがあるんだから!!」

「ゆ、ゆーなあ………」

「大丈夫、亜子、大丈夫だから」

「へへへ、そんなの後でイイじゃ〜ん？オレたちと遊びにイコ〜ぜ？」

「そうそう！後悔させねえからよお！」

そのスーパーの前の通りでは、そんなベタベタな展開が白銀を待ち構えていたのだ。

（……………はあ。しょうがない。行くか）

スーパーに行くにはあのチャライ男五人と中等部の女生徒三人の横を通り抜けなければならない。

しかし、白銀はあの三人の少女を見捨てる事が出来る程の狭い心は持ち合わせてはいなかった。

周りの人達は遠くから眺めるだけで助けようとはしない。誰だって厄介事は御免なのだ。

白銀は再び、はあと溜め息を吐き、あの少女たちの下へ向かう。

「おい、その天然記念物に指定されそうな程貴重な典型的なナンパ男共、邪魔だ。消え失せろ」

「あああん！なんだオメエ？ナメた口きいてんじゃねえぞコラア！」

「うわ！ナニその反応の仕方！？ベタベタ過ぎて逆に引くわ〜」

白銀は本気でワシントン条約で保護すべきだろうかと思った。

「さて、その三人、平気か？」

「あ、はい。大丈夫です」

「私は平気だよ！」

「う、ウチも……」

「そうか。それは良かった」

「テメエ！スカしてんじゃねえ！！」

放置されたのがよほど頭にきたのか、白銀の肩に触れようとした。

「俺に雑菌だらけの汚い手で触んなクズが」

白銀はチャラ男Aの手を躲し、居合い拳で吹き飛ばした。

「グハッ！？」

「よっちゃん！？」

どうやらチャラ男Aよっちゃんというらしい。そのよっちゃんとやらは、完全に気絶している。

（触るのがイヤだったからつい居合い拳使っちゃったけど……、まあいいか。手加減はしてあるし、居なくなっても困らない連中だしな）

白銀の中では買い物を邪魔した奴等は消えてもいい存在らしい。もっとも、か弱い少女たちに手を出そうとした時点で、白銀の処刑対象になるのだが……。

「デメエ…。よくもよっちゃんをやりやがったな!!」

「正当防衛だ」

その様子を見ていた通行人たちは、それは違うだろ!?!と思った。

「デメエら! やっちまえ!!」

残されたチャラ男Bの号令で、チャラ男C・D・Eが殴りかかる。

「きゃあ!」

「あ、危ない!」

「逃げてー!」

白銀が強いのはさっきので何となく分かっていた三人も、流石にこの人数差では危険だと思ったのか、白銀が殴られると思って目を背ける。

聞こえてきたのは誰かが殴られるような音と、殴られた人の悲鳴だけだった。

「さあ、残ったのはお前だけだぞ? チャラ男B」

しかし、三人の聞いた声は殴られていたと思われる白銀の声だった。三人はえ? と思い、目を開けると、地面に倒れているのは殴りかかったチャラ男たちだけで、白銀はチャラ男Bを嘲るように嗤っていた。

「く、クソ！なら、これならどうだ！？」

チャラ男Bがナイフを取り出す。

「「「キャア〜！！！」」」」

ナイフを取り出したチャラ男Bを見て、三人と通行人たちは悲鳴を挙げた。

「へっへっへ。どうだ？テメエもこれでお終いだなあ？」

嫌な笑みを浮かべ、ナイフを得意気に振りかざすチャラ男B。
そんなチャラ男Bを見て、白銀は呆れたように今日で何回目になるかわからない溜め息を吐いた。

「お前さ……。ナイフなんて取り出してどうするワケ？一応言っとくけどよ。そんなナイフじゃ人なんて切れないぞ？」

「は？」

「あのさあ。ナイフってのは刃も短ければ切れ味もいいわけじゃないんだ。そんなので人を切ったって筋肉と骨に阻まれて切れないし、ナイフで致命傷を与えようとするなら刺さなきゃ無理だ。後は首筋を切り付けるぐらいしかない。理解出来たか？ナイフを出した程度で俺に勝てはしないってことがよ」

この瞬間、白銀以外の人たちは思考が止まっていた。
ナイフを目の前にして恐れるどころか、呑気に説明まで始めたのだ。
無理もない。

「て、テメエ！バカにしゃがって！！殺してやる！！！」

白銀の説明を半分も理解出来なかったチャラ男Bは逆上して切りかった。

しかし、白銀は避ける素振りも見せず、やれやれと肩を竦めていた。

「はい。これでお終い」

白銀はチャラ男Bのナイフの底を足で蹴り上げ、落ちてきたナイフをキャッチした。

チャラ男Bは何が起きたのか理解出来ず、今までナイフを掴んでいた手と、白銀の手中に納まっているナイフを交互に視線を彷徨わせている。

白銀はチャラ男Bをさっさと気絶させて卵を買おうと思ったその時だった。

「卵が売り切れたのでタイムセールスを終了します！」

スーパーの店員の空気を読まない声が響いたのは……………。

「……………ウソ……………だろ……………？」

まるで、余命を告げられた患者のように、白銀は絶望感溢れる表情で呟いた。

「て、店員さん。卵……………もうない、のか……………？」

白銀は、嘘だと言ってほしい……………そんな想いを込めて店員に尋ねた。

「すみません。卵は売り切れちゃってもう残ってないんです」

最後にもう一言すみませんと言い残し、店内へ戻る店員。

白銀はそんな店員の後ろ姿を呆然と見送った後、その場に崩れ落ちた。

あまりの展開に、助けられた少女たちや、遠巻きに事の成り行きを見守っていた通行人たちも啞然としている。

「な、なんだかわかんねえーがザマーミロ！このボケが！！」

スーパーの店員よりも空気を読めなかったチャラ男B。

「……………」

無言でゆらりと立ち上がる白銀。そしてチャラ男Bを見る。

その異様な雰囲気、チャラ男Bはようやく身の危険を感じた。

白銀は一步一步、まるでゾンビの如く、ゆっくりと歩く。

「ヒ、ヒイ！？」

情けない悲鳴を上げるも、足が竦んで動けない。

「おい、キサマ」

「は、はいい！？」

チャラ男Bの下に歩み寄った白銀の表情は、邪悪に染まっていた。それは修羅だった。悪魔だった。悪鬼だった。

「キサマらの所為だ。キサマらさえ居なければ……、こんなことに

はならなかった……」

白銀から発せられるプレッシャーに、蛇に睨まれた蛙の如く、身動き一つ取ることが出来ない。

「今日、休み時間に届いたメルマガを見て、俺はこのタイムセールスを楽しみにしてたんだ……。今日の晩ご飯は大量の卵をふんだんに使ったふわふわなオムライスを作ろうと思っていたんだぞ？それをキサマらのような下等生物に邪魔されるとはな………」

言っていることは随分と家庭的な内容だった。だが、そんな白銀の様子を見ていた人たちは思った。
あいつ死んだな、と。

「光差す世界に、汝等暗黒住まう場所無し！」

白銀の右手が青白い光を帯び始める。

「乾かず、飢えず、無に帰れ！！」

そして、その右手を大きく振りかぶり、叫んだ。

「レ○リアアアア・○ン○クトオオオオオオオオオツ！！」

チャラ男Bは声を上げることも許されず、空の彼方へと消え去った。

「昇華！」

何処かで何かが爆発する音がした。
だが、この戦いに勝利した代償は余りにも大きかった。

「タイムセールス……………」

そこには、チャラ男たちに勝利した筈なのにタイムセールスに敗北した白銀と、気絶させられたまま忘れ去られたチャラ男たちに、助けられた筈なのに素直に喜べない少女たち……。そして、ただ見ていただけなのに異様に疲れた表情をしている観客たちだけだった……。

5時間目 一生真面目な奴はからかうと面白い

あの混沌と化した状況下でいち早く我に返った少女たちは、タイムセールス……卵……と呟き、落ち込んでいた白銀にお礼とお詫び？も兼ねて、近くの喫茶店で自己紹介をしていた。

「私は明石裕奈！ありがとうございます！助かったよ」

「私は大河内アキラです。ありがとうございます。助けてくれて……」

「ウチは和泉亜子言います。ありがとうございます。ホンマに助かりました」

「俺は立花白銀だ。大したことはしてないから気にするな」

白銀たちは喫茶店の奥の方にある禁煙席にいた。

白銀の対面に先程助けた少女、裕奈、アキラ、亜子の順に座っている。

白銀も過ぎたことはしょうがないと、卵を買えなかったショックから立ち直っていた。

（にしても、明石裕奈に和泉亜子、そんでもって大河内アキラ、ねえ……）

白銀はこの三人の名前に聞き覚えがあった。

白銀は結構前に、タカミチから二一Aの生徒の名前を書いた名簿を見せてもらったことがあった。

複雑な事情を持つ生徒を一纏めに行っていることは知っていたので、

どんな人物がいるかだけでも確認しておきたかったのだ。

「あの、立花さん…」

「ん？なんだ？」

いつの間にか考え込んでいた白銀は控え目にかけられた声に顔を上げる。

「いえ、その……、私たちの所為で卵買えなくてすみません…」

「ああいや、大河内たちの所為じゃない。俺が勝手にやったことだ」

「で、でも、ウチらを助けようとして卵買えなかったやし………」

「俺がいいって言うてるんだから良いんだよ。気にするな」

「「は、はい…」」

白銀としてはもう過去の話、どうでもいいことだ。

「じゃあ、私たちを助けてくれたお礼は受け取ってくれるよね？」

さっきまで黙っていた裕奈からの提案。

白銀としては礼も要らないのだが、ここで断るとしつこく食い下がってきそうなので、素直に受け取ることにした。

「まあ俺に礼をする前にだ、ちょっとお願いがあるんだが……、いいか？」

「うん。いいよ」

「私も構いません」

「ウチも」

三人の了承を得た白銀はその“お願い”を口にした。

「俺のことは白銀でいい。後、敬語も止めろ」

「え？で、でも……」

「年上やし……」

「まあまあ、良いじゃん二人とも。白銀さんがいいって言ってるんだし」

アキラと亜子は戸惑ったが、裕奈は軽く了承した。

「ま、無理にとは言わないさ。明石みたいにさん付けでもいいしな。でも立花をさん付けされるのはちょっと嫌なんだ」

アキラと亜子も相手の嫌がることをしたいとは思わないので、敬語は止めないが、白銀さんと呼ぶことで妥協した。

「白銀さんはどうして立花さんって呼ばれるのがイヤなの？」

「ゆーな、失礼だよ」

無邪気に訊く裕奈にアキラが注意する。

「いや、大した理由じゃないんだ。気にしないでくれ」

白銀はその様子を見て苦笑する。

実際、立花さんと呼ばれたくない理由は大したことはない。

（前に読んだ小説で、主人公が『立花さん』って呼んでたヒロインが死んだからって言ったらどう思うんだろうな）

もしかして『立花さん』って呼ばれると死亡フラグ？と読んだ当初は思ったものだ。今でもそう呼ばれると『七星！』と叫んでいた少女を思い出すのだ。

「そうだ！白銀さん、私のことはゆーなでいいよ」

「ん？いいのか？今日初めて会った男に下の名前呼ばせて」

「だって白銀さんだけ下の名前って不公平じゃん！だから、私のこともゆーなって呼んでよ」

「ま、そこまで言うんなら別にいいけどな」

押しの強い裕奈に苦笑しつつ、それを了承する。

「あの、私のこともアキラでいいです」

「う、ウチも」

流石に裕奈だけ名前で呼ぶわけにもいかないの、了解と返す。

「じゃあ、これからよろしくな。裕奈、アキラ、亜子！」

白銀がそう三人に笑かけると、三人とも顔を朱に染めた。特にアキラと亜子は真っ赤になって、湯気が出ているようにも見えた。

「どうしたんだ？顔が赤いぞ？熱でもあるのか？」

「「「な、なんでもない（です）！！」」」

慌てて手を振りながらそう言う三人を見て、小首を傾げる白銀。そんな行動を見たアキラと亜子が、ネコみたいで可愛いと思ったのは秘密だ。

と、その時、白銀の方から妙な音が鳴り響いた。

『フューーーーージョーーーーーン！！』

「え？なに今の？」

三人が混乱していると、徐にズボンの後ろポケットに手を突っ込む白銀。

「悪い。俺のケータイだ」

「「「え、えー！！？」」」

三人が驚きの余り、声を揃えて叫ぶ。

白銀はそんな三人を不思議そうに見ながら、携帯電話のディスプレイに表示された文字を見て、顔をしかめる。

白銀は携帯電話の通話ボタンを押し、もしもと言った。

『白銀君かの？わしじゃ』

「なんだ？『オレオレ詐欺』の次は『わしわし詐欺』か？」

『違うじゃろ！？わざと間違えんでくれんかのお』

「そうだったな。……………今は『振り込め詐欺』だもんな」

『そうそう、白銀君もそっかしいのお。……………って違うじゃろ！？わしじゃ、近右衛門じゃ！』

「知ってるよ。で、何の用だ？爺さん」

白銀はキリッと表情を引き締める。

『白銀君、侵入者じゃ』

「何処だ？」

『場所と仕事の詳細は後でメールを送るからの。確認しておくように』

白銀は了解と短く返事をして通話を切る。

すると、白銀の様子を見て疑問に思ったのか、亜子が話しかけてきた。

「あの、どうかしたんですか？」

「急なバイトが入ってな。今すぐ仕事先に行かなきゃいけないんだ」

「そうなんですか……」

残念そうな表情をする三人に、悪いなと謝り、席を立とうとした時、アキラの、あのという控え目な声が聞こえてきた。

「お礼がしたいので、その……、電話番号とメールアドレスを教えてくださいませんか？……無理にとは言いませんけど……」

白銀は鞆からボールペンとメモ帳を取り出し、番号とアドレスを書く。そして、そのページを破いてテーブルの上に置いた。

「その“お礼” っての抜きでも、電話なりメールなりすればいいさ。じゃあな」

白銀はそう言って、店から出た。

「いやー、白銀さんって良い人だね！ 見ず知らずの私たちを助けてくれるなんてねー」

裕奈が率直な感想を漏らす。

「そうやな……。……それにかっこよかったし」

ぽくとした視線をメモ帳の切れ端に向け、思わずそう呟いた亜子に、裕奈はニヤニヤとイヤな笑みを浮かべる。

（亜子ってば完全にホレたね。まあわからないでもないけど）

女の子にとって、困っている時に助けてくれる、というシチュエーションは憧れなのだ。それが白銀のように見た目も良ければ尚更だ。

「そうだね。その………凄く優しい人だと思うし……」

少し頬を朱に染めながら言うアキラ。

（これはもしかしたらアキラにも春が来たってことかなや〜）

ニヤニヤが止まらない裕奈であった。

麻帆良郊外の森の中、少し開けた広場のようになっているところでは、百を超える数の妖怪たちが二人の少女を取り囲んでいた。

「済まない龍宮、油断した」

「いや、構わないさ。刹那をサポート出来なかった私の落ち度でもある」

そこにいるのは刹那と、長身で色黒のスタイルの良い大学生にくらいに見える外見をした女性だった。

「誰が大学生だ!!」

「た、龍宮!?!」

「いや、何でもないんだ。気にしないでくれ。………只、モノロー

グに聞き捨てならないことを言われただけさ」

刹那は、モノローグとはなんだ？と思ったが、今はそんなことを考えている場合ではない！と疑問を胸の奥に仕舞い込んだ。

「龍宮、私が奴等を引きつける。その隙に術者を見つけてくれ」

「ふっ。了解した」

ニヒルな笑みを浮かべる龍宮真名。年上に見られることを嫌うクールな少女だ。

「では、行くぞ！！神鳴流奥義！百烈桜華斬！！！」

円を描くような太刀筋、刹那の周りを取り囲んでいた妖怪が数体還される。

真名は襲ってくる妖怪たちに拳銃で応戦しつつ、周囲を探る。

（やはり還しても還しても際限なく人外が召喚されるようだな）

還された分の妖怪が新たに召喚される。このままでは埒が明かない。この近くに潜んでいる筈の術者を見つけてどうにかするか、術者が召喚する魔力を失うまでこの状態は続いてしまう。

「まったく、学園長の話ではそろそろ援軍が駆け付けてくれる筈なんだがな」

「龍宮！文句は後にしろ！斬岩剣！！」

真名の呟きが聞こえたのか、刹那が怒鳴る。

「やれやれ、私にだって文句を言う権利ぐらいあるだろうに……、弾代だってバカにならないんだぞ？」

「なら、後で爺さんに報酬を上乗せしてもらえばいいさ」

真名のぼやきに返答する三人目の人間、それは……白銀のものだった。

「随分と遅かったじゃないか、白銀さん。待ちくたびれたよ」

「ヒーローは遅れてやってくるのがお約束なのさ」

白銀は無詠唱で魔法の射手を発動させて、妖怪を仕留めていく。

「白銀さん、お待ちしておりました」

「良かったな、刹那。愛しの白銀さんが助けに来てくれて」

「な！？た、龍宮！？」

顔を真っ赤にしながらも、どんどん妖怪をなます切りにしていく刹那。

「真名、刹那で遊ぶんなら俺もまぜろ」

「ふっ、白銀さんなら大歓迎だよ」

「龍宮！それに白銀さんもいい加減にして下さい！！」

「あらら、刹那が怒っちゃったよ」

白銀はおどけたように言いながら、居合い拳で攻撃し続ける。

「仕方ないさ。刹那はお嬢様と白銀さんのこととなると、自制が効かないからね」

「ああ、俺はともかくこのかは分かる気がする」

「……相変わらず白銀さんは鈍いね。これじゃ、流石に刹那が可哀相に思えてくるよ」

「ん？何か言ったか？」

「学園長からボーナスを受け取るべきかな、と言っただけさ」

真名の嘘に、そうかと返しつつ、次々と妖怪を還していく。

しかし、倒しても倒しても湧いて来る妖怪たちに業を煮やしたのか、一気に決めるべく、詠唱を始めた。

「トウス・クル・ケ・ルトウス・ストウルティウス！来たれ雷精！風の精！雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐！“雷の暴風”！！」

一気に三十近い妖怪が吹き飛んだ。

しかし、またもや数体の妖怪が光とともに現われる。だが、流石に三十もの数は一気に召喚出来ないようだ。

「刹那！俺に近づく奴を優先しろ！！真名は刹那の援護だ！！」

「承知しました。………神鳴流奥義！雷鳴剣！！」

「了解。後は白銀さんに任せるよ」

二人が白銀を守るように次々と妖怪を還していくなか、白銀は呪文の詠唱に集中する。

「トウス・クル・ケ・ルトウス・ストウルティウス！契約に従い、我に従え！！氷の女王！！来れ！！とこしえのやみ！！えいえんのひょうが！全ての命ある者に等しき死を！其は安らぎ也！——“おわるせかい”！」

妖怪たちが次々と凍っていく。更に大地が、生い茂る木々が、一瞬で凍りづけになる。そして氷の塊はバラバラに砕け散り、妖怪たちはこの世から消え去った。

（かなり魔力を持って行かれた……。やっぱ、滅多に使うもんじゃないな）

広範囲完全凍結呪文。それは通常の魔法使いよりも魔力量が優れている白銀の魔力でさえ、そうそう連発は出来ない。といっても、後三発分の魔力は残っているが……。

「流石に寒いね。北海道……、いや、ロシアにいるみたいだよ」

「辺り一面凍ってるからな。そこは我慢してくれ」

そう言う白銀は、咸卦法で体温調節しているので真名は少し殺意が湧いた。

「ならここで白銀さんを撃つことにしよう。白銀さんの返り血を浴

びれば暖まるかもしれないからな」

ガチャリと音を立てるライフル。銃口を向けられた白銀は特に慌てた素振りは見せない。

「後であんみつ奢ってやる」

「白銀さん、何か困ったことがあったら言うといい。格安で助けになろう」

あっさりと買収される真名であった。

あの後、結局妖怪が召喚されることはなかった。魔力が切れたのか、白銀の魔法の威力を恐れたのか……、どちらにせよ、術者を見つけないければ話にならない。しかし、搜索を開始してから十分経つが、白銀たちは術者を見つけることが出来なかった。

（このままじゃ埒が明かないな。他の魔法先生に頼んで搜索してもらうか？）

そんな考えが頭によぎった時、刹那の携帯電話が鳴り響いた。

「桜咲です。………はい。………わかりました。では失礼します」

三分にも満たない通話を切り上げ、刹那は携帯電話をしまった。

「誰からだ？」

「瀬流彦先生からです。術者は瀬流彦先生が捕縛したのもう帰っても良いそうです」

「何か最後だけ瀬流彦先生に持ってかれた感じだな」

「私としては、報酬分の仕事はしてあるから楽が出来て良い」

真名は生徒でもあり、世界の紛争地帯を周った傭兵でもあるのだ。お金に関してはかなりシビアだ。勿論、プロとして仕事はキッチリこなすが……。

「じゃあ、報告とかの細かいことは瀬流彦先生に任せて、皆であんみつでも食いにいくか。真名に奢ってやるって約束したし」

「気が利くね。流石は白銀さんだ」

「龍宮！白銀さんにたかろうとするな！白銀さんもまたそんなことを……」

「刹那は俺と一緒にあんみつを食べたくないのか……」

「あ、い、いえ、別にそういうわけでは……」

悲しそうな表情で呟く白銀に、刹那は慌てて弁明する。

「そうか。良かった。刹那に嫌われたらどうしようかと思ったよ」

「そ、そんな！私が白銀さんを嫌うことなど有り得ません！……………むしろ、その……………」

白銀としては冗談で言ったのだが、冷静さを失った刹那は気付かない。

勢いよく否定するも、最後の方は声にも出せず、顔を赤くしながら指先をくるくると回す始末。

（まったく、見てるこっちが恥ずかしくなるよ。白銀さんはかなりの天然ジゴロのようだからな。早くモノにしないと、大変なことになるかもしれないぞ？刹那）

真名はそんな二人を見ながら、刹那の恋を応援？するのだった。

6時間目 俺の休日の過ごし方？別に普通だろ（前書き）

白銀の休日の過ごし方を書いていたのに何故かこんな話に………何故だ？

6時間目 俺の休日の過ごし方？別に普通だろ

今日は日曜日。学生が一週間の内で一番好きな曜日であると言っても過言ではないだろう。

学園都市である麻帆良学園でもそれは例外ではない。休日でも部活がある生徒は部活に精を出し、部活のない生徒は友人とともに青春を謳歌する。

しかし、そのどちらにも含まれていない白銀は一人、ゲームシヨツプに来ていた。

（あったあった♪サカキの情報通りだな。このゲーム、あんま有名じゃないから何処の店にも置いてないんだよな）

サカキはかなりの情報通で、白銀の欲しがっていたゲームの情報も、こうして時々仕入れてくることがあるのだ。

（サカキには今度メシでも奢ってやろう）

白銀はサカキに感謝しつつ、そのゲームに手を伸ばすと、横から出てきたもう一つの手と重なった。

「「え!?!」」

ビックリして隣を見ると、そこには眼鏡をかけた長髪の少女がいた。

「なんだハルナか……。ビックリさせるなよ」

「そう言う白銀さんこそビックリさせないでよ!?!」

少女の名は早乙女ハルナ。漫画研究会と図書館探検部に所属している。

「ふう。相変わらず騒がし……鬱陶しい奴だな。少しは静かに出来ないのか？」

「ちょ！？なんで今言い直したの！？騒がしいでいいじゃん！なんで鬱陶しいに言い替えたの！？」

「ハルナは騒がしいというよりも、鬱陶しい奴だと途中で気付いたからに決まってるだろう？」

「そんなの決まってるじゃないよ！！私鬱陶しくない！どっちかって言う」と騒がしい方だよ！！」

「なるほど。一応騒がしいという自覚はあるのか」

「しまった！墓穴を掘った！！」

がっくりとうなだれてしまったハルナ。白銀はそれを見て、勝ち誇ったような表情をする。

「ふっ、俺に舌戦を挑んだ時点で貴様の負けは決定していたのだよ。………というわけでこのゲームは俺が貰っていく」

白銀はゲームの見本を取り、購入する為にレジに向かおうとするが、そこで諦める程ハルナも素直じゃない。

「させるか！」

「フッ、残像だ」

「な、なんだってー!!」

ハルナは白銀に飛び掛かるも、簡単に避けれてしまう。しかも、ボケる白銀についノッてしまい、更にタイムロス。

これを狙ってやってるのはかは白銀にしかわからない。

そして、白銀を行かせまいとハルナも妨害するが、その努力は実を結ぶことなく、白銀は遂にレジへ辿り着いてしまった。

「これください」

「少々お待ちください………………。大変お待たせしました。3, 800円になります」

白銀は財布から野口さんを四人取り出して店員に渡す。

「4, 000円お預かりします。200円のお返しです。ありがとうございますー!」

お釣を財布に入れ、立ち去ろうとした白銀だったが、何かを思い出したかのようにピタッと止まり、その場で蹲り、どんよりとしているハルナを横目に見ながら店員に尋ねた。

「このゲームの在庫ってまだありますか？」

「すみません、お客様。当店の在庫にはもう残っておりません」

「そうですか。ならいいです」

白銀をハルナの肩を叩く。

「ううゝ……。白銀さんの鬼畜ゝゝゝ。こんないたいけな美少女を苛めて何が楽しいのよゝゝゝ……」

「自分で美少女とか言うなよ。後、誰が鬼畜だ。人がせつかくこのゲームやらせてやろうと思ったのに」

「え？ホント!？」

さっきまでうなだれていたのが嘘のように飛び付いてくる。

「ああ、来週うちの寮に取りに来い。貸してやるから」

「ヤッター！白銀さん愛してる!!」

「俺は愛してない。後、そんな恥ずかしい台詞を大声で叫ぶな」

周りの客たちが何事かと二人に注目しているのだ。
目立ちたくない白銀としては、かなり居心地が悪い。

「ちっ！俺はもう行くぞ！」

「あ、ちょ!?!待ってよゝ!?!」

その場から逃げるように立ち去る白銀と、何故かその後を慌てて追いかけるハルナであった。

「そういえば、なんでハルナはあのゲームがあそこにあることを知ってたんだ？」

店を出て、少し行ったところで、先ほどから気になっていたことを尋ねる。

「サカキさんに教えてもらったの。……もしかして白銀さんも？」

「……………なるほど。サカキの奴、俺とハルナの両方に情報を流してたのか…………。オシオキが必要だな」

ニヤリと、邪悪な笑みを浮かべる白銀に、悲鳴こそ挙げなかったものの、ハルナはあまりの恐怖に身震いした。

「そういや昨日は図書館探検部の活動日だったな。その時に聞いたのか？」

「い、イエス!!」

何故か英語で返答するハルナに、白銀は疑問を抱いたが、どうでもいいかと思えることを止めた。

（図書館島か…………。そういえば最近行ってないな。今度時間が出たら行くか）

白銀は万年帰宅部だが、図書館探検部に所属しているサカキに誘わ

れ、何度か地下に潜ったことがある。

その時に後輩のハルナと、その友人である二人、宮崎のどかと綾瀬夕映と知り合いになったのだ。

（といっても、のどこには未だに避けられてるけどな……。まあ、名前で呼べるようになっただけでも進歩した方だし）

のどかは軽度の男性恐怖症で、白銀がのどかと出会った当初は話すだけでも苦勞したものだ。慣れている筈の図書館探検部の男子部員でも似たような反応なので、余り気にする必要はないのかもしれないが……。

「そういえば、夕映とのどかは一緒じゃないのか？」

「ああ、二人はあそこの本屋にいるよ。私がゲーム買って戻ってくるまでの間、待ってるって……」

「そうか。じゃあついでにジャ○プ買って帰るか。確か今週号は土曜発売だったし……」

白銀は毎週欠かさず読んでいる週刊誌を思い浮かべる。漫画は白銀の数少ない趣味の一つなのだ。

因みに、白銀は他に○ンデー、マガ○ン、ジャンプ○Q、ガ○ガン、○ヤンピオン、更にはコ○プ○ースや○ュータ○プ、ドラ○ンマガ○ン等も購読している。

趣味は少ないが、意外とのめり込むタイプなのである。

「ふむふむ……。つまり、久し振りにゆえ吉と会いたってことだね〜！」

「何故そうなる!？」

「テレないテレない」

「テレてない! なんでもかんでもそういう話に持って行こうとするな!!」

若干、頬を赤く染めながら怒鳴る白銀。恋愛方面には疎いのでそこから攻められると弱いのだ。

（白銀さんって普段落ち着いてるのに意外と初心なんだよね♪しかも頬を赤くするところがカワイイ!）

勿論、そんな白銀の弱味を知っているハルナにとっては、からかいのネタに出来るので大歓迎だ。

「ほらほら♪怒ってないで、早く本屋に行こう!」

本屋に向かって走り出したハルナに、白銀はしょうがないなと嘆息しながら、追いかけるのであった。

綾瀬夕映、宮崎のどかの二人はハルナが来るまでの間、本屋で暇をつぶしていた。

「むむ! のどか見るです! 番外編が完結してから約一年振りに新刊

が出てます!」

「ゆえはそのお話好きなんだ。わたしはこっちのお話が好きなの」
「そういえばこの間そんなことを言っていましたね。のどか」

（この主人公はネギ先生に似てますね……。つまり、のどかはこの本が面白いから好きなのではなく、主人公がネギ先生に似てるから好きだという可能性があるですね）

のどかはあの子ども先生に助けられてからというもの、まだ九歳の子どもであるネギのことが好きになってしまった。

それはのどかの親友である、夕映とハルナには周知の事実である。もし、のどかの好きになった相手がちゃんぽらん男なら、夕映はのどかの親友として忠告なりなんなりするだろうが、相手がネギのような子ども……。それも男性として、夕映風に言うなら“マシな部類の人種”ならば、全力で応援、又は手助けしようと考えてるだろう。

実際、夕映はハルナとともに、のどかがネギと少しでも話せるようにアプローチをかけているのだ。まあ、本当に少ししか話すことが出来ないのだが……。それがのどかの性格なのだから、仕方がないことだと思う。

恋をしたからと言っても、人間は急には変わらないのだ。そこは気長に接していくしかないと夕映もハルナも考えている。

（といっても、昔に比べれば大分マシになったのですが……）

図書館探検部としてずっと活動を続けてきたからなのか、顔見知りの男子が相手ならまともな返答が出来るようにはなった。それでも自分からは決して近付こうとはしなかったが……。

「あ、ゆえ！あそこ見て！！」

のどかの声に、乖離していた意識を現実に戻す。

すると、のどかはいつの間にかレジの近くに移動しており、そこから右奥の本棚を指差していた。

いったい何を見つけたのだろうか？と少し興奮した様子ののどかに疑問を覚え、のどかの指差した本棚を見る。

そこはどうやら蔵書の類を押し込められた本棚のようだ。ここからではどんな本が置いてあるかは分からなかったが、夕映は一つだけ異彩を放っている本を見つけた。

他の蔵書は真新しいカバーに包まれていたが、その本だけは古ぼけていて、まるで時代に取り残された、取り壊し寸前のアパートのような印象を他者に与えていた。

（あれは……？古本を置く場所を間違えたのですか？）

一瞬頭にそんな考えが浮かんだが、夕映は否と自らの考えを否定する。

世の中には変わり者が大勢いるが、幾らドジで物覚えの悪い人間でも、流石に新品の本と遠目で見ても古いと一目で分かる本と一緒にほしめないだろう。

いや、もしかしたら麻帆良の人間ならするかもしれないが……。

（あの汚れ具合からして……、相当の年代物のようですね。そして、のどかのあの様子……、まさかかなりのレアものなのでは！？）

夕映は急いで本棚に近づき、その背表紙に記されている本の題名を読み取る。

そこには、『ナイアルラトホテップの生態』そう書かれてあった。

「ま、まさかあれは！？伝説的なパチものと噂されつつも数々の伝承に基づいて表現されたナイアルラトホテップの生々しさにその手の人には喉から手が出る程欲しいとさえ言われた幻の本ではないですか！！？」

「そ、そんなに嬉しいの？」

「当たり前です！世に出回っているのは僅か千冊。オークションにかければ数百万はくだらないですよ！！」

「そ、そうなんだ……。よかったね。ゆえゆえ」

夕映の喜ぶ様を見て、我がことのように顔を綻ばせるのどか。
ひとしきり喜びを分かち合った二人は本を取ろうとしたのだが、深刻な問題に直面した。それは……

「と、届きません……」

そう手が届かないのである。

あの本は本棚の上段にある。未だ中学生であり、クラスでも小柄な体型の二人に手が届くハズがなかった。

（ここはやはり店員を呼んだ方がよいのでは？しかし、本に手が届かないので取ってほしい等と言うのは私の沽券に関わるです……。どうするべきか……。ん？あれは……）

夕映の視界に入ったのは小さい子ども様に置かれている土台だった。あれを踏み台にすれば本に手が届くかもしれない。

（あれを使うのも少々癪ですが、背に腹は替えられませんね）

夕映は土台を本棚に運び、上に乗った。そして目一杯手を伸ばすが、それでも後もうちよつとところで手が届かない。

「後、もうちよつと………きやつ！」

なんとか本を取ろうと背伸びをしたのがいけなかったのか、夕映はバランスを崩してしまった。

「ゆえ!？」

のどかが悲鳴を挙げる。夕映はそれを聞いて初めて自分が床に落ちていくのを自覚した。

時間がゆっくりと流れていく。これが走馬灯というヤツなのですね、と場違いな感想を抱いた。それは怪我はするだろが死にはしないことを分かっていたからかもしれない。

夕映は目を閉じてもうすぐくるであろう衝撃に備えた。しかし、その衝撃はぽすんという擬音が似合いそうな程あつけないものだった。子ども用の土台とはいえ、それなりの高さはあつた。しかも、硬い床にぶつかったのだ。この程度で済む筈がない。

夕映はゆっくりと目を開ける。その眼前には自分の顔を心配そうに覗き込んでいる白銀の姿があつた。

「し、白銀………さん？」

「よお、夕映。大丈夫か？まったく………欲しい本を自分で取ろうと意固地になるなんて、夕映らしいよ」

白銀は夕映が無事なのを確認出来て安心したのか、苦笑した。

「ありゃー。白銀さんってギャルゲの主人公みたいなイベント起こり過ぎでしょ」

ニヤニヤとチシャ猫のような笑みを浮かべているのはハルナで、その隣りではのどかが顔を赤く染めていた。

はて、何かのどかが赤面する様なことでもあるのでしょうか？と、夕映が思案し、今の自分の体勢がどうなっているか、ようやく理解した。

今の夕映は土台に足を乗せた状態で、主に上半身を白銀に預けているのだ。傍目から見れば、恋人に寄り掛かっているようにも見える体勢だ。こういったことに免疫の無いのどかが赤面するのも頷ける。そしてそれは、今さらながらに自分の体勢に気が付いた夕映にも当て嵌まる。今の夕映の顔は林檎のように真っ赤になっていた。

「て、おい、顔が赤いぞ？熱でもあるのか？」

白銀は夕映をひょいっと持ち上げて自分の額と夕映の額をピタッとくっつけた。

「■☆\$*▽◆?!?!?!?!?!?!?!」

「うーん……。特に熱は無いみたいだな。ってなに笑ってんだよハルナ」

「い、いや、ぷっくくく……。白銀さんってホント無自覚にフラグ立てるんだなあって思ってた……。プククク……」

余りの恥ずかしさに声にならない叫び声を挙げる夕映と、目の前で起こっている出来事に頭から湯気を出すのどか、そして本当に何も

分かってない白銀……。それを一步離れた場所で眺めているハルナは込み上げて来る笑い声を噛み殺すのに必死になっていた。

無事？に買いたい本を買うことが出来た夕映は女子寮への道のりを白銀と二人で歩いていた。

ハルナは他に用があるのを忘れていた、と言い残し、のどかを連れて何処かに行ってしまった。のどかもハルナと共に消える前に頑張っ
てね！ゆえ！と頬をほんのり朱に染めながら言っていた。

（まったくバカバカしい……。私が白銀さんのことが好きだと……。いえ、別に嫌いなワケではないのですが……。って何をアホなことを考えてるですか私はー！ー！！？）

思わず脳内で絶叫してしまった夕映を頭の上に？を浮かべた白銀が見ているが、当然、夕映は気付いていない。

「なあ、夕映。俺の話聞いてるか？」

「そもそも白銀さんが私のことなど意識しているハズがないではないですか！まったく、ハルナものどこもすぐにそういう方向に話が行くんですから！それに私は白銀さんを………」

「夕映！」

「ひゃあ！？な、なななななんですか白銀さん！？急に大声出さな

いでください！」

「夕映がさっきから話しかけてるのに返事しないからだろ……」

「す、すみません……」

白銀の話を聞いていなかった自分が悪いので夕映はすぐに謝った。

「ああ、いや。気にするな。別に怒っちゃいねえよ」

「そ、そうですか」

「ああ」

それっきり、会話が途絶えてしまった。

そのまま奇妙な沈黙が続く。

（くっ、気まずい……。相手が刹那とか真名とかなら幾らでも話すネタがあるのに……）

白銀にとって一番話にくいのが“普通の女の子”である。仕事上の付き合いのある人間ならば、魔法や体術などについて話せるが、相手が一般人となると、白銀が話せることは極端に少なくなる。

元々、無趣味な人間だったので“普通の話”をするのが難しいのだ。

（なんとかして会話の糸口を見つけないとな……。……て、なんだありゃ？）

夕映の手にはさっきまで無かったハズのジュースが。しかも『佃煮コーラ味』という不可思議な文字……。白銀は何故か無性に気に

なって気になってしょうがなかった。

「なあ、夕映？その………なんだ？『佃煮コーラ味』って………美味しいのか？」

「……………飲んでみますか？」

夕映は懷から紙パックを取り出す。その紙パックには『佃煮コーラ味』と書かれてあった。

（……！？予備だど！？しかも懷というジュースが体温で温くなる
バッドポジションから！？……………果てしなく不安だ）

しかし、そこは男の子。そんなことはおくびにも出さずに夕映からジュースを受け取る。

数秒間じっとジュースを見つめた後、意を決して一気にその口内にどろっとした黒い液体を流し込んだ。

「……………どうですか？」

「……………ビミョーだ」

甘いとも辛いとも言えない面妖な味………、美味しい訳でもなく特別不味い訳でもないこのジュースに対する評価としては妥当だろう。

「そのビミョーさがこのジュースの持ち味なのですよ」

得意気にそう語る夕映を見て、白銀は本当に変わったジュースが好きなんだなあと思い、微笑ましそうに眺めるのだった。

6時間目 一俺の休日の過ごし方？別に普通だろ（後書き）

出来るだけ原作キャラを出したいと思って書いていたらこんな話になっちゃった……………。

しかも夕映の口調が難しくてかなりてこずったし……………。次はもっとスマートに書きたいです。

7 時間目 一爺さんの道楽にはもううんざりだ（前書き）

途中から自分が何を書きたかったのかわからなくなってきた。

今回の話で文体がオカシイと思ったら、作者が夏の暑さの所為で脳が茹ったのだと思って下さい。

7 時間目 一爺さんの道楽にはもううんざりだ

三月も終わりに近付き、桜も蕾が膨らみ出す。春になり、桜が満開となる日も近いだろう。

ネギも今まで高等部とのドッジボール対決や、惚れ葉騒動などの修羅場を潜り抜けたこともあり、最近ではすっかり教師が板に付いてきた。

そんなネギに、学園長はある課題を出した。それは……

「二一Aの最下位脱出ねえ……」

今白銀が居るのは学園長室だ。当然、白銀と学園長以外の人間はここには居ない。

「今二一Aの成績表を見た限りじゃ不可能なことじゃないが……、ネギには未だ無理だろ？」

二一Aには学園トップクラスが何人か居るが、それを帳消しにしてしまう生徒が五人居た。だが、成績が悪いということは伸び白もその分あるということだ。

最下位を脱出するだけなら、この五人を徹底的に勉強させれば不可能ではない。しかし、それを未だ数えて十歳の子供にやらせるのは無理があると白銀は考えたのだ。

「それでもこの学園で教師を続ける以上、何らかの試練が必要なんじゃよ」

「そうは言ってもなあ……」

白銀も近右衛門の言い分は理解出来る。子どもであるネギが教師を続けるには何らかの功績が必要なのだ。

そもそも、まだまだ遊びたい盛りであろうネギが教師をしている時点で異常なのだ。周りの人間に認められるにはネギが教師としてやっていける証拠を見せるしかない。

それが今回の最終課題をネギに与えた理由なのだろうという結論に辿り着いた。もっとも、それで納得出来るような人間なら、こうして学園長に苦言を呈したりはしないのだが…………。

（それに爺さんがそれだけの理由で最終課題なんて出す訳がない。何かしらの裏が有る筈だ）

近右衛門は喰えないジジイであることは麻帆良の人間には周知の事実である。なら、白銀が別の思惑があるのでは？と勘ぐるのは当然のことと言える。

しかも、その理由がただ面白そうだったから、などというふざけたものである可能性も有るのだから質が悪い。

「とにかく、ネギ君には最終課題をやってもらおう。これは決定事項じゃからの。今変更は出来んよ」

「……………分かった。もう俺からは何も言わんさ」

渋々と言った様子で引き下がる。これ以上抗議しても無駄だと判断したからだ。白銀は学園長に養って貰っている身だ。強くは出られない。

「……………すまんう。白銀君の気持ちも分からんでもないが、これもネギ君の為を思ってたことなんじゃよ。分かってくれんか？」

「……………そこまで言われたら納得しないワケにはいかねえだろうが！まったく……………、しゃあねえな。これからは決める前に俺にも言えよな」

一見、厳しいとも思える試練には二通りある。一つ目は妬みや恨みによるもの、二つ目はその人間に対する期待の大きさによるものだ。今回のケースに当て嵌めて言えば後者に当たる。というか、基本善人の多い麻帆良ではそんな意地の悪い真似をする人間はそうそう居ない。居たとしても、近右衛門や他の教師が許さないだろう。特に“鬼の新田”と恐れられている指導教員が“デスメガネ”という異名を持つタカミチと共にSEKKYOを試みることだろう。

「……………確約は出来んぞい？それでも構わんのなら努力しよう」

「ああ、それでいいさ。爺さんにも立場ってのがあるし、俺みたいなガキの顔色をイチイチ気にするのは他の連中に示しがつかんだらうからな」

近右衛門の答えは白銀にとっては既に予想済みのものだった。近右衛門と白銀では考え方も違うし立場も違う。背負っているモノも守るべきモノも違う。

近右衛門が何を思っただけでネギに試練を与えるのかは解らないが、それは必要なことだからだろう。何も知らない人間が口出しする様なことではないと白銀は思った。……………それでもつい口を挟んでしまう辺り、白銀の人の善さを感じさせる。

「白銀君には苦勞をかけるのお」

「別に。爺さんが俺に迷惑をかけるのは今に始まったことじゃないからな。もう慣れたさ」

「そうかそうか。それじゃあ苦勞ついでに一つ頼まれてくれんかの？」

「いや少しは自重しろよ!？」

結局、今日も近右衛門に振り回される白銀なのであった。

図書館島には数え切れない程の本が安置されている。その量は半端なモノではなく、恐らく一生かけても全ての本を読むことは出来ないだろう。

更に言えば、貴重な蔵書も数多く存在しており、その貴重な蔵書の中には魔導書の類も存在し、それを狙って忍び込む盗掘者も居る程だ。

そして、今まさに図書館島に忍び込んでいる一団が居た。

「わーーーーっ!？本がいっぱい!ホントにスゴイぞ!！」

図書館島にある沢山の本を見て驚きの声を挙げているのは、何故か寝間着姿のネギである。

ネギはメルディアナの魔法学校に居た時から図書室で本を読み漁っていた読書家でもあるのだ。沢山の本がある。それだけで好奇心が刺激されるのだろう。実際、ネギの目は興奮の余り輝いていた。

しかし、不用意に本棚に触れようとはしなかった。何故なら、単純に危ないからだ。

先ほども述べたように、この図書館島にある貴重書を狙った盗掘者が入り込むことが多々ある。

だが、この図書館島には盗掘者用の罠が至る所に仕掛けられており、今まで本を盗まれたことは無かった。

ネギは図書館島の地下三階に到着して早々、この罠を作動させてしまい、恐い思いをしたのだ。慎重になるのは当然といえる。

（そういえば、どうして僕はここにいるんだろう？）

ネギはつい先ほどまでベッドで寝ていたのだが、同室の明日菜と木乃香に起こされ、何の説明も無しにここまで連れて来られたのだ。疑問に思うのも無理はない。

ネギは自分をここまで連れてきた面々に目を向ける。

そこに居るのは自らが担任を務める二一Aの生徒たちの中で、最も成績の悪い五人組だった。この五人組はその成績の悪さからこう呼ばれた……、バカレンジャーと……。

バカレンジャーの構成員は神楽坂明日菜、バカレッド長瀬楓、バカイエロー古菲、バカビき絵、バカブラック綾瀬夕映となっている。

今、図書館に忍び込んでいるメンバーには、それ十図書館探検部の一員である近衛木乃香もあり、同じく図書館探検部に所属している早乙女ハルナと宮崎のどかは地上にて連絡係として待機している。だが、何故自分をここに連れてきたのか、何故明日菜たちは図書館島に忍び込んでいるのが分からなかった。

なので、ネギは何故こんなところに来たのか、明日菜たちに尋ねた。

「えっ……ええ……っ！？ここに読むだけで頭が良くなる『魔法の本がある……！？』」

そんなネギの声が響き渡ったのは、その数秒後のことだった。

あれから幾多のトラップを乗り越え、ネギたちは『魔法の本』があるとされる目的地までようやく辿り着いた。

そこは、地下にあるとは到底思えない広い空間だった。床、壁、天井……、その全てが石で造られており、壁際に配置されている本棚だけが異質な物に感じられた。

そして、この部屋で最も目立つのは中央に聳え立つ2体の石像だろう。騎士の様な容貌のそれは、今にも動き出しそうだった。そんな荘厳な部屋を見て、ネギたちは感嘆の声を挙げる。

「す、すすスゴすぎるーっ！？こんなのアリー！？」

「私こーゆーの見たことあるよ。弟のプレステで！」

「ラスボスの間アルー」

いや、感嘆ではなかったようだ。感嘆の声を挙げていたのは『魔法の本』の安置室です。とうとう着きましたね……』と呟いている夕映だけなのかもしれない。

と、そこで他の生徒と騒いでいたまき絵が部屋の中央に目を向け、何かを見つけたのか大声で叫んだ。

「見てっ！！あそこに本が！！」

「！？ あっ…あれは！？」

「ど、どうしたのネギ!？」

部屋の中央で、騎士の石像に守られているように安置されている本を見て、ネギは驚愕した。

「あれは伝説の『メルキセデクの書』ですよ!!信じられない!!僕も見るのは初めてです!!なぜこんなアジアの島国に!？」

「てことはホンモノ……?」

「ホ、ホンモノも何も、あれは最高の魔法書ですよ!!確かにあれならちよつと頭を良くするくらい簡単かも……」

ネギは感動した面持ちで、鼻息を荒くしながらその本を眺めた。

「やったー!!」

「これで最下位脱出よー!!」

「一番ノリアルー」

それを聞いたバカレンジャーは皆一斉に本目掛けて駆け出した。運動神経は良いと豪語するだけのことはあり、かなりの速度だ。……夕映を除いて。

「皆さん待って下さい!あんなに貴重な魔法書、絶対ワナがあるに決まっています!気をつけて!!」

と、ネギが警戒を促すもバカレンジャーたちはそれを意にも介さず、そのまま橋を渡ろうとしている。

ネギと木乃香が慌てて追いかけ、橋に足を乗せた瞬間、ネギたちは突然浮遊感を感じた。

「「「「「えっ!?!」」」」」

橋が開き、足場を無くしたネギたちは、そのままニュートンの万有引力の法則に従い、落下する。

華麗に着地出来たのは楓のみだったが、幸いにもそのすぐ下に別の足場があった為、きちんと着地出来なかった面々もいたたとぼやきながら大した怪我も無く無事に立ち上がった。

「コレって……?」

「ツ……ツイスターゲーム……?」

ネギたちが落下したその床には平仮名が書かれており、ツイスターゲームをそのまま床の大きさに引き伸ばしたようだった。

しばし呆然としてっていると、辺りに『フォフォフォ……』という笑い声が響き渡った。

どこからともなく聞こえてくる、何処かで聞いたことのあるような笑い声。

ネギたちが音源を探す前にその声の主……二対の石像が動き出した。

『この本が欲しくば……わしの質問に答えるのじゃー! フォフォフォ♪』

見た目の割りには随分とノリノリな石像である。しかもその声の主は、今も学園長室でこの部屋の様子をモニターしている近右衛門だ。この仕掛けを作るのにかなり時間も労力も使ったハズだが……、後

悔も反省もしていないようだ。

自分が楽しむ為なら生徒が危険に陥らない程度になんでもするその信条には呆れを通り越して感嘆すら覚える。

『では第一門。“D I F F I C U L T”の日本語訳は?』

生徒たちが石像が動くという常識外の現象を前にパニックになっているのを良いことに、問題を出す石像……、というか近右衛門。

自分の声だというのがバレないよう、うやむやにする魂胆なのだ。それなら最初からヴォイスチェンジ魔法使つとけよ!と白銀なら突っ込みを入れていただろう。

「み、みんな落ち着いて!! 大丈夫です! ちゃんと問題に答えればワナは解けるハズ! 落ち着いて“D I F F I C U L T”の訳をツイスターゲームの要領で踏むんです」

見れば分かるが、この歳で生徒をまとめようと状況を説明するのはなかなか出来ない。
そこら辺にネギの非凡さを感じさせる。

「ええーっ!? そんなコト言っても……」

「“デイ：ディフィコロト”って何だっけ先生ーっ!?」

自分たちも習ったであろう簡単な英単語すら解らない生徒たち……、流石はバカレンジャーである。読者の期待を裏切らない。

『教えたら失格じゃぞ』

「いっ…E A S Yの反対ですよっ! えと“簡単じゃない”!!」

近右衛門の釘をさすような一言を聞き、ネギはバカレンジャーでも答えが解るようにヒントを出した。

そのヒントのお陰でバカレンジャーも答えが解ったのか、『む』『ず』『い』の三つの文字板を手で押さえた。

『“難しい”……正解じゃ』

「や……やった！」

「きゃー！これで本GETだねー♪」

微妙な答えではあったものの、近右衛門は正解とした。こういうところに融通が利くのが近右衛門の良いところである。

『第2問“CUT”』

「……ってコラー!!」

「ちよっとちよっとーッ!？」

『手を別の所につけたら失格じゃぞー』

しかし、これで本を手に入ると喜んでいた生徒たちに更に問題を出す辺り、近右衛門の意地の悪さが滲み出ていた。

その後も順調に近右衛門……いや、ここではゴーレムと表記しよう……の出す問題に答えるバカレンジャー。だが、正解していくにつれ、その体勢は大変なことになっていった。夕映曰く、『問題に作為を感じるです……』。

『最後の問題じゃ。“DISH”の日本語訳は？』

「えっ……？ディッシュ……？」

「ホラ！食べるやつ！食器の……」

「メインディッシュとかゆーやろー」

困惑するバカレンジャーにヒントを出すネギ。それに補足するかのようにもう一つヒントを出す木乃香。最後の問題だけあって応援にも身が入るようだ。

「わ……わかった！“おさら”ね！」

「“おさら”OK！」

答えが解り勢いづいたバカレンジャーは力強く文字板を押した。『お』『さ』『る』の三つの文字板を……。

「…………おさる？」

「ちがうアルよーッ！」

『る』の文字板には明日菜の足とまき絵の手が……。最後の問題で

のケアレスミス。最後の最後で間違っただけに精神的なダメージもかなりのものである。

『ハズレじゃな。フオフオフオ』

どこか楽しげな声でそう言ったゴーレムはその手にある巨大なハンマーで床を叩き割った。

「アスナのおさるくく!!」

「いやあああくく!?!」

「みんなゴメーン!!」

ネギたちは何処までも続く暗闇を落ちていった……………。

ネギが目を覚ますとそこには広大な湖と数え切れない程の本があった。

「何処だろう、ココ……」

口に出してみるが、それに反応してくれる人は何処にも居なかった。

「みんな……、何処に行っちゃったんだろう……………」

ネギは、心細げに呟いた。目には涙が溜まっており、今にも泣き出してしまいそうだ。

そうやってネギがべそをかいていると、辺りから何か食欲をそそるような美味しそうな匂いが漂ってきた。

（この匂い……何処から……？）

ネギは泣きそうになっていたのも忘れて匂いの出所を探し始めた。

（こっち、かな？）

ネギが寝かされていた場所から少し歩いた先にある本棚の裏に回り込む。すると……

「お、ようやく起きたのか。ネギ」

と、声をかけられた。

ネギが声のした方向に顔を向ける。そこに立っていたのは、両手に包丁とじゃがいもを持っている、何故かエプロンを身につけている白銀の姿だった。

8時間目ー俺のイライラは溜まる一方だ（前書き）

最近文章が出てこなくなってきました。
かなりヤバいかもです。

何か指摘が御座いましたら、どうぞ宜しくお願いします。

8時間目 一俺のイライラは溜まる一方だ

とんとん……、という小気味の良い音が聞こえる。それはメトロノームのように一定のリズムで続く。その音が聞こえなくなると、次に聞こえてくるのはぐつぐつという何かを煮込む音。

それに合わせるようにまたとんとん、と音が重なる。そして、ぐぐ、というお腹の音も鳴り響く。

それはさながらオーケストラのようで、聞く者全てを心地よい空腹感と失笑へと誘うハーモニー。

鍋から漂うスパイシーな香りが食欲をそそる。その香りを嗅げば、誰しも唾液を無意識に口内に溜め込むことだろう。なかには口から溢れ出す者もいるかもしれない。

「しろくん。ご飯炊けたえ」

「じゃあ先によそつといってくれ。こっちはもう少しかかるから」

「了解や」

鍋の中身が焦げないようにおたまをかき回しているのはエプロン姿の白銀だった。上機嫌にカレーを煮込んでいる様はどことなく近寄り難い雰囲気を感じさせる。

そんな白銀を補佐するのは白いエプロンに頭巾まで被っている木乃香だ。常に微笑みを絶やすことのない木乃香は、いつにも増して機嫌がいい。今にも鼻歌を歌い出しそうなくらいだ。

そんな二人の後ろ姿を、バカレンジャーとネギは空腹に耐えながら眺めていた。

「ホント、白銀が料理出来るなんて知らなかったわ」

「男の人なのにな。私女の子だけど料理出来ないのに……………」

「アスナさんはともかく、まき絵さんも料理出来ないんですか？」

「ちょっとネギ！私はともかくってどういう意味よ……！？」

「あぶぶぶ……！？す、すみません！止めて下さいアスナさ……ん！？！？」

明日菜に頭を掴まれてがくがくと揺らされるネギ。余りの速さに残像が見える。

「へへ。アスナもまき絵も料理出来ないのか」

と、そんな会話もキッチリ聞こえていたらしく、白銀は意外そうに呟いた。因みに、自己紹介は既に終わらせている。その際に、女だと間違われたのはご愛嬌である。

「アスナが料理したら、いろいろ大変なことになるんよ。まき絵は普段家事とかせえへんからとちゃう？」

白銀の呟きに反応したのは木乃香だった。ルームメイト兼親友である明日菜に対しては実体験を、まき絵に関しては想像で答えた。

「エへへ……………。その通りで……………」

それでもその想像は当たっているのでまき絵は素直に家事が出来ないことを認めた。

「……………もしかしてアスナは、料理したら鍋とか爆発させるタイプ？」

「白銀さん、それは流石に漫画の読み過ぎです。そんな人が実在するハズ……………」

「な、なんで知ってんのよ……………!？」

「「実在した!？」」

「しろくんも夕映も息ぴったりやなあ」

「「そこ気にするところじゃないから（です）!!？」」

「うわあ……。ホントに息ピッタリね」

「お前まで納得すんなよ!？」

「鍋とか爆発させる人にだけは言われたくないです!!？」

白銀と夕映が必死に否定するものの、何故か全員に温かい目で見られしまった。

「と、とにかく。話を元に戻そう」

形勢の不利を悟ったのか、話題を変えようと最初の質問に答えることにした。

「確か……………、なんでオレがここに居るかだったな」

白銀はカレーを皿に移しながら学園長室であつたことを思い返した。

「実はの、図書館島の地下には生徒たちの間で噂されとる『幻の地底図書室』という場所があるんじゃないが……」

「『幻の地底図書室』？」

（そういえば前にサカキと夕映がそんな話してたな）

幻の地底図書室……。それは図書館探検部のメンバーの間で、まことしやかに囁かれている噂の一つだった。曰く、地底なのに太陽のような暖かい光で満ちている。

曰く、普通は手に入らない貴重品で溢れている。

曰く、地底図書室を見て生きて帰った者はいない。e t c. e t c.

（あの時は下らねえな、とか思ってたけど、まさか実在していたとはな）

麻帆良には魔法使いが住んでいる。それは同時に、麻帆良にはそれだけ不可解な現象も数多く発生することにも繋がるのだ。

その不可解な現象を目撃した者はそれを他者に話し、それは噂として広まっていく……。その中には、当然生徒が面白がって広めたデタラメな噂もある。

困った時に助けしてくれる魔法少女や桜通りに出沒する吸血鬼のような、犯人に心当たりのある噂は白銀も意外と真実ってすぐ側にある

よなあ、と感心していたが、幻の地底図書室のような音楽室の開かずの間レベルの噂は信憑性も低かったのであまり信じてはいなかった。

だが、今回は魔法関係者の白銀でさえ、下らないと断じた噂こそが真実だったのだ。

白銀が驚くのも無理のない話だろう。

「で、その地底図書室になにがあるんだ？ また厄介事じゃないだろうな」

「ふおっふおっふお。簡単な仕事じゃよ。ただその地底図書室まで行って、ある魔法書を再封印して欲しいだけじゃからの」

「封印？ 俺は封印系の魔法はあんまり得意じゃないんだが……」

「大丈夫じゃよ。封印が解けかけとるだけじゃからの。今の封印式に魔力を流せばすぐに終わる」

「……………どれだけ簡単でも結局面倒なことに変わりはないな」

白銀は今から図書館島まで行って、更に地下の何処かに存在する地底図書室まで行かなければならないという事実、面倒クサイという感想しか湧き上がってこなかった。

（まさか、このままの理由を言う訳にはいかねえよなあ……………。は

あ……)

回想を終えた白銀は、目の前で白銀の返答を待っているバカレンジ
ヤー＋αを見渡した。

ここまできて、言わない、という選択肢を白銀は取れなかった。こ
の話題はカレーを煮込んでいる最中にフラれたもので、その時はご
飯が出来上がったらなど、そう言って後回しにしたのだ。義理堅い
白銀に、今更無視は出来なかった。

「実は……………」

「「「実は……………」」」

白銀はそこで一旦口を閉ざし、数秒ほど全員の顔を見渡してから、
さも深刻そうにこう言った。

「道に……迷ったんだ」

「「「え、えーっ！っ！？」」」

そんなネギたちの叫び声が、地底図書室に木霊した。

白銀のお手製カレーを堪能した後、バカレンジヤーと木乃香はネギ
の授業を受けていた。

「では、この問題を……………夕映さん」

「はい。……………“第六天魔王”です」

「夕映？そこは普通に“織田信長”でええやん」

「いえ、ここはやはり“第六天魔王”と言った方が、きっと読者の方々も楽しんでくれます」

「若本さんは人気あるからなあ」

「ねえ、ネギ……………“読者の方々”と“若本”ってダレ？」

「さ、さあ？僕もわからないです……………」

非常に危険な会話を交わしている夕映と木乃香を尻目に、明日菜とネギは二人の会話の意味が解らず、目を白黒させている。

「“若本”ってあのV字でベリーメロンの人の声だよね？」

「ボールを7個集めると願い事を叶えてくれる龍が出てくる漫画にも出てたアルよ」

「二人とも博識でござるな」

……………どうやら、ネギと明日菜以外は若本についての知識はあるようだ。

「え、ええっと……………取りあえず夕映さん。テストの時はきちんと“織田信長”で解答して下さい。点が出ないので」

「はいです」

あくまで淡々とした表情で応える夕映に、ネギは本当にわかっているのかな？と不安に思ったが、自分の生徒を信じることにした。

（それにしても、白銀さんはいったい何処に行ったのでしょうか？）
微妙に不安そうにしていたネギを、相変わらず感情の起伏に乏しい顔で眺めていた夕映は、いつの間にかこの場から居なくなった白銀のことを考えていた。

（白銀さんのことですから、突然のアクシデントにも平然と対処出来るとは思いますが……、やはり心配ですね）

図書館探検部の部員は、サカキに連れられてやってくる白銀のことは知っている。

特に、サカキと一緒に探索したことのある部員は、その女性的な見た目とは裏腹に、凄まじい身体能力を発揮する白銀の姿を目にしているのだ。サカキと行動を共にすることがある夕映も当然、白銀がどれだけ強いかも理解している。

それでも心配してしまうのは、白銀の道に迷ったという話を嘘だと勘づいているからかもしれない……。

一方その頃、皆の前から気付かれないように姿を消した白銀は、本来の任務を遂行すべく、一人で魔法書が封じられている湖に潜っていた。

（クソ！魔法書探し出すだけでこんなに苦勞する羽目になるとは……）

白銀が魔法書の探索を始めて数十分……。悪態をついてしまうのも無理はない。

（しかもネギたちのことを爺さんに報告したら、無事に脱出出来るまで護衛して欲しいだとお！？言われんでもやるわ！！つーか迎えくらい寄越せよ！？今度会ったらタダじゃ済まさねえぞクソジジイ！！！！）

この地底図書室で気絶していたネギたちを発見した白銀は、直ぐに近右衛門に報告した。その答えがこれだ。

『魔法書を再封印するついでに、木乃香やネギ君たちのことをよろしくの。なに、期末試験に間に合えば問題はないわい。じゃあ、それまで頼んだぞ……い』

ふざけるな。それが近右衛門の返答を聞いた、白銀の第一声であった。

近右衛門は、木乃香のことを誰よりも大切に想っている。この間も木乃香が欲しがっていたタロットカードをプレゼントしていた。

麻帆良学園の学園長兼関東魔法協会のトップである近右衛門も孫の木乃香には激甘なのである。

そんな近右衛門が、特に強力な罫が仕掛けられている訳でもないとはいえ、こんな場所にいつまでも木乃香たちを居座らせようとは考

えない……………筈だ。

ならば、考えられる可能性はただ一つ……………、木乃香たちがここにやってくることを近右衛門は知っていたのだ。

そして今回の白銀の任務場所と被るのも気にかかる。

（あのジジイのことだ。今回の件については予め予測していて、勉強や生活に必要な道具を準備してたってことも充分考えられる……………。だから俺がここに来るように仕向けた。このかたちを守らせるタメに……………）

所詮証拠も何も無い、ただの推測でしかないが、白銀はそれが一番近右衛門らしいやり方だと思った。

（爺さんに対しては何を言ってもムダか……………。どうせコレもネギに与えた試練なんだろうし、それでも少しは自重してもらいたいんだかなあ……………）

白銀は爺さんが自重するわけないか……………、と即座に結論を出してため息を吐いた。

それからしばらくして、白銀はようやく魔法書を見つけることが出来た。

魔法書があったのは、湖の底。そこから続く洞窟の奥だった。洞窟を抜けた先にある、小さな部屋に安置されていたのだ。

「これか……。たくっ、手間かけさせやがって！」

なかなか見つからなかった魔法書と近右衛門への苛立ちにより、白銀の心はかなり荒んでいた。

腹いせに、全力で魔法を放ってこちら一帯を吹き飛ばしてしまおうかと思ったが、それは流石にシャレにならないので止めておいた。

「さっさと封印して戻るか……」

そう言って白銀が魔法書に触れると、突然魔法書が光出した。

「な、なんだ!？」

その光は更に光量を増していき、ついには目を開けてはいられないほどの眩しさとなった。

「こ、こんなの聞いてねえぞ!？あんのクソジジーーーーッ!?!？」

その叫び声を最後に、白銀の肉体は消え去った。

8時間目 俺のイライラは溜まる一方だ（後書き）

ネギたちが勉強してる間に白銀は頑張ってたんだよ？そういう話を書きたかったんです。

そして相変わらず夕映の口調が難しい……。

9時間目　ストレスって爆発するんだな（前書き）

今までほったらかしにして申し訳ございません。

言い訳は言わないので出来れば許してください。…………無理ですか、
そうですか。

とにかく、今回の話は出来が悪いと思うので、余り期待しないでください。

自分で言うことではないですけどね。

9 時間目 ― ストレスって爆発するんだな

あの凄まじい光量の光に包まれた白銀は、いつの間にかとても美しい泉のほとりに立っていた。

「空間転移か幻想世界か、はたまたどこかの異空間か……。いずれにせよ、ここが安全な場所だとは思わない方が良さそうだな」

気付けば先ほどまで居た場所とは全く別の場所に移動していたというのに、白銀は冷静だった。

一瞬でここが何処なのか推理し、候補を幾つかに絞った。勿論原因はあの魔法書にあるとみて間違いないだろう。

（マナが濃いな……。エヴァの別荘と同等かそれ以上か……。随分と厄介な場所に引きずり込まれたようだな）

マナが濃い、ということは、魔法に関連する“何か”がこの場所にある可能性が非常に高い、ということになる。

もしその“何か”が敵意や悪意を持っていた場合、危険度は格段に跳ね上がる。

例えば、結界や幻術等の魔法的トラップ。鬼や悪魔、ドラゴン等の襲撃……。可能性を挙げればキリがない。

そんな、何が起るかもわからない危険な場所に居るというのに、白銀が慌てる素振りすら見せないのは、こういった状況に慣れているからだ。

白銀はしょっちゅう厄介事に巻き込まれている。

それもこの状況以上に危険な出来事に巻き込まれたことも多々あるのだ。今更この程度のことを取り乱したりはしない。

（とにかく、ここから脱出することが先決か。セオリー通りにいくなら、何処かにこの空間の起点となるものがあるハズなんだがな）

白銀は辺りを見回すが、それらしいものは見当たらない。

（これは、地道に探すしかないかな。かなり面倒だが……、仕方ないか）

そうやって、白銀が溜息を吐こうとしたその時だった。泉からぼこぼこという音が聞こえ始めたのは。

「なんだ？ モンスターとでもエンカウントすんのか？」

白銀は軽口をたたきながら油断なく敵を見据える。

「お前か、私に触れたのは……」

数秒ほど経って泉から出現したのは非常に美しい女だった。

髪は長く、腰まで届いており、その丰满な胸は、全ての男を魅了するかの如くぷるんぷるんと揺れている。

そのくせ女の身体はとても細い。腰などそんじょそこのグラビアアイドルよりも細く、美しい。

目は切れ長で凛々しく、鼻は高い。唇はぷつくらとしており、とても艶めかしい。

女の着ている服は踊り子のような露出の激しい物で、たわわに実った胸が今にもこぼれそうだ。

さて、この妖艶な雰囲気放つ、絶世の美女と言っても差支えのない女には一見して人間ではないと判断できるものがあった。それは肌の色だ。

この女の肌は全体的に青みがかっており、髪の色も服の色も青だった。

「私はこの世界の主、そして、気安く私に触れたお前には罰を与えよう。一生をこの世界で過ごし、朽ち果てるがよい！」

女の言葉は、横暴極まりないものだった。その尊大な口調からして、プライドが高いこともうかがえる。

だが、白銀にはそのすべてがどうでもよかった。

「ウルセーんだよこのヤロー」

「貴様！この世界の主たる私に向かって何という口のきき方……」

「喰らえ。“魔法の射手・連弾・雷の16矢”」

白銀は女の台詞を遮り、魔法の矢を放つ。
だが、女は水の障壁を生み出して防いだ。

「貴様！いきなり何を……」

「トウス・クル・ケ・ルトウス・ストウルティウス！来たれ雷精！
風の精！雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐！“雷の暴風”……」

「くっ！ちょございな……」

風を纏った雷が女にめがけて飛来する。しかし、女はそれを寸でのところで躲す。

「悪いが、これで詰みだ」

「なに！？」

女の避けた先には既に白銀の姿があった。

女が避けられない、防御も間に合わない必殺のタイミング。

白銀はこの状況を作る為にわざわざ簡単に避けられる単純な攻撃を繰り返したのだ。

そして、女の腹に白銀は右掌を当て……………

「解放！ “白き雷”」

その雷が、女を貫いた。

「いや、すみませんでした！ 本っ当に、申し訳ございませんでした
！！」

「はんっ！ 口だけならどうとでも言えるぞ？ この駄本が」

「そ、そんな！ 私は本当に猛省しております！ ですので、何卒、何卒ご容赦を……………」

女が白銀に土下座しているのは魔法書が安置されていた洞窟である。
あの後、白銀の魔法により女は気絶し、現実世界へと戻ったのだ。
この女は、力のある魔法書が何百年、何千年も経つことで生まれる

という魔法書の意味だったのだ。

あの世界は魔法書の意味である彼女が作り出したもの、彼女が意識を失えば崩壊してしまう脆い物だった。

そのことを白銀は知っていたわけではないが、今まで溜まってきた鬱憤を晴らす為にやった、八つ当たりとも言える行為が功を奏し、無事に脱出することが出来たのだ。

「ふん……、まあいい。何故お前はあんなことをしたんだ、答える」

「そ、それは……」

「お前に答えないという選択肢は無い。言うか言わされるかだ。お望みなら幾らでも拷も……尋問してやるが？」

「い、言います！言わせていただきます！！」

人間ではないとはいえ、彼女もこれ以上白銀の不興を買いたくはないのか、白銀がひくほどの剣幕で咽び泣きながら詰め寄ってくる。その姿には、先ほどまでの妖艶さも尊大さも見うけられない。

「じ、実はですね……」

「実は？」

言いよどむ女にその先を促す。が、女は身体をもじもじと恥ずかしそうにくねらせるのみで何も言わない。

「言うつもりがないのか」

「ち、違います！ひ、非常に言い難いと申しますか……、言うて怒られるんじゃないかな、なんて思いました……」

「言わなかったらどっち道怒るから、言った方が怒りは少ないと思うぞ？」

「じゃ、じゃあ言います！」

白銀の脅しともとれる言葉にようやく決心がついたのか、女は意を決して口を開いた。

「寂しかったんです！」

「………はあ!？」

「何年も、何十年もずっと一人ぼっちだったから………、誰かと一緒に居たかったんです!!」

魔法書の意味の思いもよらなかった答えにしばしの間呆然としてしまったが、白銀はすぐに意識を取り戻し、彼女に同情的な視線を送った。

かつて、白銀も独りだった。5年前に家族を喪ったあの日から。麻帆良に来なければ今もずっと独りきりで孤独な生活を過ごしていたかもしれない。

だからこそ、魔法書の意味の“寂しかった”という想いに白銀は共感することが出来るのだ。

白銀は涙ぐんでいる魔法書の意味を視界の端に捉えながら、近右衛門へ念話を送る。

『爺さん、どうせ近くに居るんだろ。さっさと返事しろ』

『何かわしの扱い酷くないかの』

『爺さんの扱いなんてそんなもんだろ。そんなことよりさっさと本題に入らせてもらう』

そんなことって酷すぎやしないかの、という近右衛門の呟きを無視して報告を行う。

『再封印をするように言われていたが、その魔法書に意思が生まれていた。この場合はどうすればいい？』

『ふむ……………、白銀君はどう思う？』

『こいつは独りになることを恐れている。ここで封印しなおしても何れ封印を解いてしまうだろう』

『……………なら、どうするべきだと？』

『地上に連れて行く』

『……………本気なんじゃな？』

『当たり前だ』

ピンと張りつめる空気、お互いの姿が見えずとも滲み出る異様な圧力が両者の間を漂っていた。それはめそめそと泣いていた魔法書の意味にも感じ取れるほどのものだった。

『……………ふおふおふお、やはり白銀君に任せて正解じゃった』

『ふん、別に俺じゃなくてもタカミチだってそう言うさ』

『ではその魔法書のことは白銀君に任せる。異存はないかの？』

『ねーよ』

『では白銀君、後は頼んだぞい。わしはこれでも忙しいからの』

なにが忙しいだよ、この狸爺が。白銀はそう呟きながら念話を切り、魔法書の意味へと目を向ける。

「おい、お前。地上に連れて行くことになったから」

「……え？」

「まあ今すぐって訳でもないけどな。お前の持ち主になるつもりも今のところはないし」

驚いた顔をする魔法書の意味を余所に、白銀は淡々と告げる。

魔法書を持つつもりがないのは単純に必要なから。

この魔法書、名を“蒼海の書”と言うのだが、その名の通り、水を司る魔法書なのだ。

白銀の得意な属性は雷・氷・光の三つ。水属性の魔法も使えなくなはないが、蒼海の書には主に治癒系の魔法が記されており、治癒魔法が苦手な白銀には無用の長物なのだ。

（どうせ持って帰るなら“あいつ”にやるか。俺が持っても意味ないしな）

白銀は自分と同年の、白衣が非常に似合う少女を脳裏に描く。
常に飄々とした態度を崩さない彼女に貸しを作るのは面白そうだ。
と少々意地の悪い笑みを浮かべる。

「ちょ、ちょっと待ってください!」

「どうした?」

「ち、地上に連れて行ってもらえるのですか?」

「ああ」

「わ、私はもう……一人ぼっちにならなくてもいいのですか?」

「ああ」

白銀がそう答えると、魔法書の意味……蒼海の書の瞳から涙が零れ
落ちた。

彼女にとって、ずっと独りで過ごしていくのは苦痛だった。それこ
そ、誰かを無理矢理自分の世界に引きずり込むほどに。

「ありがとうございます!ありがとうございます!」

先ほどまで恐怖の対象だった白銀に、蒼海の書は泣きながら感謝す
るのであった。

木乃香は一人、今日のご飯の準備を着々と進めていた。

白銀が未だに帰ってこないことを気にはしていたが、心配は今のところしていなかった。

木乃香は白銀と一緒に遊びに出かけたことが多々ある。その度に事件や事故が発生し、それを白銀が瞬く間に解決しているのをその目で見ているのだ。

今回も何らかのトラブルがあったのだろうと予想を付け、その内戻ってくるだろうと高をくくっていた。

もし、今回居なくなったのが白銀以外の人物だったのなら、木乃香はその人物の身を案じるだろう。例えばそれが見ず知らずの他人だったとしてもだ。

そんな、木乃香の優しさを知っている人物……明日菜たちからすれば、居なくなった白銀のことを全くと言っていいほど気にかけていない木乃香の姿は、異常であると思えたのだ。

故に、明日菜たちは木乃香から数メートルほど離れた地点で円になって話し合いをしていた。

「ねえ、みんな。このかのこと、どう思う？」

「いつも通り、ですよね」

「白銀さんがいないのに……、絶対変だよ」

「そうアルカ？わたしにはよく分からないアルヨ」

「ふむ。拙者は余り気にする必要はないと思うでござるよ」

「私も同意見です」

木乃香を心配する三人を余所に、何も分かっていないチャイナ娘が一人と、木乃香の様子がおかしいとは思わないという二人に意見が別れた。

楓は白銀が相当の実力を持っていることを見抜いていたから。夕映は自分よりも木乃香の方が白銀との付き合いは長いことは知っていたので、その木乃香が心配していいのであれば、自分たちが木乃香のことで心配する必要はないと感じたのだ。

古は白銀が強いということしか分かっていないので除外させてもらう。戦ってみたいとは思っていないバトルジャンキーだから。

「……む!？」

「どうしました？古さん」

「なんだか今、誰かにバカにされた気がするアル……」

「そりゃバカレンジャーの一員なんだから、バカにされて当然なんじゃないか？」

「ちょっと!？それじゃ私までバカにされてるってことになるじゃない!？」

「事実だろーが」

「なんですってえー！ー！ー!!?」

淡々とした声にバカにされた明日菜は、まさに怒髪天を衝く、といった様子で、二つに分けてある髪を逆立てながら後ろに振り替える。

（誰かは知らないけど、ここまでバカにしてくれたんだから、ただじゃすまさないわよ!?!）

けれど、明日菜は気付いてなかった。今、自分たちをバカにした声が最近聞いたことのある声であることに。先ほどまで噂していた人物であることに……。

明日菜は振り返りながら手を振りかぶる。しかしその平手が罵倒した相手に当たることは無かった。

「俺に一撃喰らわそうなんぞ、百年早いわ」

「きゃ!?!」

明日菜の手首を掴んでそのまま一本背負いの要領で投げ飛ばされる。短い悲鳴は挙げてしまったが、身体能力だけは高い明日菜は空中で体勢を立て直し、綺麗に着地した。

「なにすんのよアンタ!?!……って白銀!?!?!」

「気付くのおせーよ」

はあ、と呆れたように溜息を吐く姿は、なにやらとても疲れているようにも見えた。

「あんた! 今までどこ行ってたのよ!?!」

「内緒だ」

白銀は明日菜たちの追及から逃れるように木乃香の許へと向かう。木乃香も白銀が戻ってきたことに気づいていたらしく、料理の手を

止め、言った。

「しろくん。おかえり」

「ああ、ただいま」

微笑を浮かべる白銀の手には、分厚い蔵書があったそうだ。

9 時間目ーストレスって爆発するんだな（後書き）

魔法書の名前は適当に思いついたのを書いただけなのでツツコミはナシの方向でお願いします。

どこかのオルカさんとは無関係なので。

えー、これからも、なんの前触れもなく更新が停滞することがあるとは思いますが、どうか皆様、長い目で見てやってください。

では、よいお年を。

10時間目一あの爺さんは殴っても許されると思う（前書き）

どうも皆様、お久しぶりでございます。

今回、ようやく暇と調子を取り戻し始めてまいりました。

えー、随分と日が経ってしまいましたが、なんとか更新できるレベルになったと自負しております。

なにぶん、久しぶりなもので、大変見苦しい文章となってしまった感はありませんが、これからよろしく願います。

10時間目―あの爺さんは殴っても許されると思う

「では、これわかる人―」

パジャマ姿という、傍から見れば間抜けにしか見えない格好で、ネギは黒板に書かれてある問題を指揮棒で指した。

そんなネギの授業を受けているバカレンジャー＋1は一斉に手を上げた。……明日菜以外。

「ハイ、佐々木さん」

「35です」

「正解でーす」

自分の生徒の成長が嬉しいのか、ネギはまき絵に拍手を贈った。

他の生徒たちも、おゝ、と称賛の声を上げる。

そんな皆の反応にまき絵は頭の後ろに手をやり、照れたようにてへと笑った。

けれど、例の如くその場に白銀の姿は見えない。では、白銀はいつたいどこに行ったのだろうか。

その答えを簡潔に言うと、白銀はネギたちが勉強している場所から数十メートルほど離れた地点にある湖の畔に立っていた。

図書館島の最深部、幻と噂されていた地底図書室に遭難してから約一日。テストまでもう日がないことを思い出した白銀は、地上への出口を探していたのだ。

（俺の勘が正しければ、ここら辺にありそうなんだが………っと）

白銀は自分の勘を頼りに、この辺りを探索していた。そして、白銀が目にしたのは一番高い位置から水が流れている滝だった。

（まさかとは思うが、こんな分かり易いところにあったりなんか………したよ）

漫画やゲームでは王道ではあるが、まさか本当に滝の裏側に出口があるとは思わなかった白銀は、呆れともとれる溜息を吐いた。

それも非常口のマークがドアの上についているのだ。白銀が呆れるのも無理はない。

しかもふざけたことに、ドアにはこう書かれてあった。

『問1・英語問題

readの過去分詞の発音は？』

もはや呆れ果てて溜息を吐く気力すら湧いてこない。

これも近右衛門の悪ふざけなのだと思うと、殺意すら湧きあがる思いだった。

帰ったら取りあえず一発殴ることを心に誓った白銀は、今日の分のご飯を食べ終えた後、全員でここを脱出することを決めた。

でもその前に……。

「水浴びでもしておくか。いい加減気分悪いし」

例え男と言えども、毎日行っている習慣は身についている。

浄化魔法を使えば身体の汚れは落とせるが、そこはそれ、気分の問題なのである。

湖にでも浸かっていないと、身体が綺麗になったという実感が湧か

ないのだ。

白銀は出口へと続く扉を一瞥してから、湖へと向かった。

湖の水は案外温かく、感覚としては温水プールに近い。

熱めのお湯で入浴している人にとっては物足りなく感じてしまうのだろうが、白銀は余り気にしてはいなかった。

ふう、と息を吐きながら大きく伸びをする。そしてそのままの体勢で、背中から水中に倒れこむんだ。

より正しく言うなら、仰向けの状態で浮いているというのが正しいか。

「気持ちいい……」

目を細め、呟いた白銀の姿は、とても幻想的で美しかった。

このシーンを見て、白銀を男だと見抜くことの出来る人間は一体何人いるだろうか？

といっても、胸部や股間を見れば性別は一目瞭然なので、この問いかけは何の意味も為さないのだが……。

（風呂は命の洗濯、か……。今みたいに精神的に疲弊してる時は、その言葉の意味を身を持って痛感させられるな）

全身の力を抜いて、仰向けの状態でぶかぶかと浮かびながら、白銀は誰の言葉かも忘れてしまった言葉に共感していた。

別に、特別風呂が好きという訳でもないのだが、ここのところストレスが溜まりっぱなしだったこともあって、温水に浸かりながらぼうつと出来るこの時間がとても貴重なものなのだと思えた。

「そういや、俺もテストがあるんだったな。ま、ノートの見直しなら一時間でできるから別にいいけど」

今思い出したかのように呟いた白銀だったが、その発言自体に嘘はない。

白銀のいう勉強とは、自分のノートを一時間ほどかけてじっくりと読む。ただそれだけのことなのだ。

果たしてこれを勉強と言えるのかどうかは甚だ疑問だが、白銀にはそれで充分なのだ。

ノートさえテスト直前に見直せば最低でも赤点は避けられる。それが白銀のテストに対する考えだった。

勉学に励む真面目な学生が聞きでもしたら激怒するような考えである。不真面目な学生でも似たようなことを思うかもしれないが。

（そんなことより、問題なのは……向こうで覗き見してる連中だよなあ）

気を抜いてリラックスしている今の状態でも、白銀は警戒を怠ってはいない。

故に、例え目に見える範囲に居なくとも白銀に視線を向ければ、それを知覚することは白銀にとっては容易なことなのだ。それが素人のものであるならば尚更だ。

「覗いてるのはまき絵と古と楓か……。まったく、普通逆だろ？ こういうのって……。ま、俺は覗くつもりなんか毛頭ないけどな」

そうボヤキながら白銀は考える。

この場合、さっさとこの場から立ち去る方がいいのか。それとも、いっそのこと視線を無視してゆっくりするのかを……。

その頃、まき絵、古、楓の三人はというと……。

「はわわわ！？だ、駄目だよ！こ、こんなこと！？」

まき絵は慌てながら、自らの目を手で覆ってはいるものの、その手には隙間が空いているのはご愛嬌か。

始めて見る異性の肉体に顔を朱に染めながらも、思春期特有の異性への好奇心からか、興味はあるようだ。

（男の人ってあんななんだ……）

学校の勉強よりも、異性に対する勉強の方がはかどっているようだ。出来ればその集中力を普段も発揮してほしいものである。

「むう、拙者よりも細いとは……」

楓は白銀のウエストが自分のそれよりも細いことにショックを受けているようだ。

閉じているように見えるその細目が、今は見開かれている。

楓は幼い頃から忍者として修業してきた。

今さら男だ女だということに拘るつもりはないが、それでも女とし

てのプライドのようなものがどこに残っていたらしい。

(……テストが終わったら、しばらく甘味を控えてみるでござるか)
少なくとも、人生初のダイエットを試みようと思わせるほどには。

「あいやー、ちょっとドキドキするアルよ……」

頬を赤く染め、恥ずかしそうにそう呟いたのは古だった。

一番色恋沙汰に興味が薄そうに思われる彼女だが、意外とこういうことには初心なようだ。

格闘技をしていると、全裸の男はともかく、半裸の男くらいなら見慣れているような気もするが、それとこれとは話が違うのだろう。

(それにしても、引き締まった身体アルね……。手合せしてみたいアルよ。でもやっぱり恥ずかしいアル……)

心の内では、白銀の筋肉の付き方などを観察していた古ではあったが、そこは年頃の女の子。異性の身体を見て恥じらうことはするようだ。

だが、こうして白銀にばかり意識を向けていたのが悪かったのか、少女たちの背後から浮上しようとしている黒い影に気付かなかったのは……。

「キャーキャーッ！」

絹を裂くような女の悲鳴。

それを聞いたのはすぐ近くで水浴びを堪能していた白銀だけではなく、そこから少し離れた湖で水浴びしていた明日菜とネギも同様だった。

否、ネギは偶々来てしまっただけで、別に明日菜と一緒に水浴びをしていた訳ではないが、一緒に居たこととは確かなので悲鳴もきっちり聞こえていた。

どうしたんだろう？と純粹に疑問に思っているのは明日菜だけで、ネギは自分でもよく分からない感情に振り回されていた時に悲鳴を聞いたため、意味もなく縮こまっていた。

「大変や、アスナー！」

「どうしたの、このか！？」

そんな二人の元へやってきたのは木乃香だった。

いつものほんとした木乃香にしては珍しく慌てた様子である。それを見た明日菜はただ事ではないことを本能的に悟った。

もつとも、ネギは顔を赤くして岩陰に隠れていたが。

それでもピンチらしい教え子の元へ駆けつけるために、木乃香の先導で悲鳴の聞こえた方向に急ぐ。

「あっ」

そうして辿り着いた先には、あのクイズで煮え湯を飲まされた憎きゴーレムとそのゴーレムに捕まっているまき絵の姿だった。

楓と古は持ち前の運動神経と戦闘経験により、ゴーレムの奇襲に対応できたが、新体操が出来ることと勉強が人より出来ないこと以外は平凡な中学生であるまき絵はゴーレムに捕らえられてしまったのだ。

「ぼぼ、僕の生徒をいじめたなっ！いくらゴーレムでも許さないぞっ！」

そんな可愛い教え子の姿を見て、憤慨したネギは、怒り心頭と言った面持ちでゴーレムに近づいていく。

その手にはいつの間に手に取ったのか、父親より譲り受けた杖を持っていた。

小声で呪文を唱え、魔力を集中させるそして……

「くらえ、魔法の矢！！」

完成させた魔法で敵に攻撃しようとしたが、何故か魔法は発動せず、周りの空気が停止してしまった。

（あ……、しまった。まだ封印一本残ってたんだっけ）

ネギは今更ながらに自分で魔法を封印したのを思い出したのだ。

魔法はネギにとって使えるのが当たり前になっていたので、生徒を助けるために無我夢中になっていたネギはそのことをすっかり忘れてしまっていたのだ。

魔法が発動しなかったことに安心した近右衛門……もといゴーレムは、内心でほっ…、と安堵の息を吐き、威勢を取り戻したかのようには喋り出した。

『フオフオフオ、ここからは出られんぞ。もう観念するのじゃ。迷宮を歩いて帰ると三日はかかるしの』

「ええっ」

「み、三日!？」

「それではテストに間に合わないアル」

衝撃の事実慌てふためく生徒たち。それを見たネギはなんとか励まそうと生徒たちを激励しようと声を張り上げる。

「み、みんな、あきらめないでっ」

「そうだ。諦める必要はない。出口なら、俺が見つけてあるからな」

「そうです。出口なら見つかって……、あれ？」

ネギは突然割り込んできた声に首を傾げる。

出口なら俺が見つけてある？自分はそんなもの知らないし、ここにいる生徒たちも知らないだろう。

だとすれば、この声の主は、いざという時に頼りになりそうなあの人しかない。

「昔の人は言いました。諦めたらそこで試合終了ですよ……ってな！」

「白銀さん!」

やはりと言ふべきか、自分の予想通りの人が助けに来てくれたことでネギも余裕が出てきた。

あとはゴーレムに捕まっているまき絵を助けだし、出口まで白銀が案内してくればこちらの勝ちである。

「木乃香！皆の荷物を！」

「りょうかいや！」

白銀の指示で木乃香は皆の荷物を纏めるためにこの場から離脱する。これで当分の間、木乃香が危険な目に遭うのは避けられる。

ここまでは、概ね白銀の思惑通りに進んでいた。しかし、その後の夕映の台詞はいただけなかった。

「ん……？あ！！みんな、あのゴーレムの首のところを見るです！」

「あっ！あれは、メル……何とかの魔法の書！？」

見れば、確かにそこにメルキセデクの書はあった。本から感じる魔力から鑑みるに、確かにあれは本物なのだろう。

だが、白銀にとってはやっかいな代物でしかなかった。

（チッ！夕映の観察力を見誤った俺のミスか……。てか、なんであのクソジジイはメルキセデクの書なんぞ持ち歩いてんだ！！バカか！？バカなのか！？）

白銀は内心で近右衛門を激しく罵倒する。ついでに、ここから出たら見返りに何を要求してやろうかという算段まで立て始めた。

やられっぱなしは性に合わない。この辺でストレスの帳尻を合わせておかないと、胃に穴が空いてしまう。

もしくは近右衛門を一発……否、全力の一撃を一日一回打ち込まないと気が済まない。

「本をいただきます！ まき絵さん、クーフエさん、楓さん！」

「OK！ バカリーダー」

夕映の呼びかけに親指をビシッと立てて答えた二人は、ゴーレム目がけて疾走する。

その速さは、一般人のそれとは比べ物にならない。特に楓は忍の者。速さだけなら、間違いなくトップクラスだ。

「中国武術研究会部長の力、見るアルよー！」

先ずは古の先制攻撃。ゴーレムの左足に全力の一撃。それは素手だというのに、頑強なゴーレムの足に罅が入るほどの威力だった。

そうして、ゴーレムのバランスが崩れた瞬間を狙って、まき絵を捕まえている右足に蹴りをいれる。

まき絵が捕まっていたので、流石に罅が入るほどの威力ではなかったものの、ゴーレムがまき絵を捕まえている手を弾くのには充分だった。

「よ」

楓はその隙に、空中でまき絵をキャッチした。

正に余裕綽々、ゴーレムもこの連携にはたじたじである。

しかし、これで終わりではない。

まき絵は、楓にお姫様抱っこをされている状態で新体操に使うリボンを使い、首回りにあったメルキセデク書を見事に強奪せしめた。

これには白銀も近右衛門も、驚愕で開いた口がふさがらない。

いくら特殊な事情を持った人間を集めたといっても、ここにいるのは裏を知らない表の住人。流石にここまでのことを仕出かすのは予想外だった。

（ヤバイヤバイヤバイ！？どうすんだよ爺さん！？このままじゃ、伝説とまで言われた魔法書を持ち逃げされちまうぞ！？）

白銀は内心ではかなりテンパっていたが、そんなことはおくびにも出さずに先頭を走り抜ける。

後ろでは荷物を取ってきた木乃香が、皆に着替えを渡しているところだ。男の白銀が後ろを振り返るのは色々和不味い。常識的に考えて。

白銀の見つけた非常口には英語の問題が書かれてある。この問題を正解しないと扉は開かない仕掛けになっている。

当然、白銀にこの問題を答えるつもりはない。これもバカレンジャーの知識を試すという、近右衛門の思惑があることを理解しているからだ。

白銀にとっては簡単過ぎるこの問題も、バカレンジャーにとっては難問だ。白銀に出来ることは、答えを考える時間稼ぎをすることだけだった。

だが、その考えは良い意味で裏切られた。

突然の問題にあたふたしていた明日菜とまき絵だったが、魔法書を手に使っていた古があっさりと解いてしまったのである。

白銀を先頭としたバカレンジャー一行は、急いで扉の先へと進んだ。奥へ奥へと全力で走り、遂に開けた空間へと出る。

「うわっ！何コレ！？」

「らせん階段！？」

「コレ、上まで登るん？」

そこに待っていたのは、上を見上げても終わりが見えないらせん階段だった。

これを登るのは骨が折れそうだ。しかし、今の彼らに躊躇などして
いる暇は無い。

ゴーレムが階段を崩しながら登ってくる。早く先へ進まなければ、
自分たちも危ない。

駆け足で階段を登った先に待っていたのは問題付の壁だった。これ
も問題を解かなければ進めない仕掛けになっているのだろう。

だが、この問題も、魔法書を持っていた楓がいとも容易く解いてし
まった。

恐らくはメルキセデクの書の効果なのだろう。でなければ、バカレ
ンジャーである彼女が、こうも簡単に問題を解けるはずがない。

その後も次々と出題される問題を魔法書の力で解いていくバカレン
ジャーたち。

「す…凄いです！バカレンジャーのみんな！」

それに感嘆の声をあげるネギ。自分の教え子が次々と問題を解いて
いくのが嬉しいのだろう。

「アスナとまき絵まで答えられるなんて、この魔法の本、本物アル
！！」

「「悪かったわね！！」」

と、ここまで順調に進んでいたバカレンジャーだったが、現実はその
ままで甘くなかった。

「あうっ!？」

「夕映ちゃん!？」

「こんなところに木の根が……、あ……足をくじきました」

可及的速やかに退避しなくてはならないこの時に、夕映が足を挫いてしまったのである。

それを見た白銀が素早く夕映に近づく。

「夕映! 大丈夫か!？」

「し、白銀さん……。いえ、だいじょ……。きゃ!？」

あの転び方はかなり不味いものであることは長年の経験で分かっていたので、返事など聞かずに夕映を抱き上げた。

「悪いが、暫らくの間我慢してくれ」

「し、ししししし白銀さん!？」

「ほら、しっかり掴まっとけ」

白銀はそう言って、夕映の身体に負担がかからないように走りだす。

(こ、こここここここの状態は……! じ、実は非常に恥ずかしいのでは!?)

右手が背中、左手が膝裏を支えている。そう、俗にいうお姫様抱っこである。

先ほど、楓がまき絵に行っていた抱き方ではあるが、今回は同性ではなく異性の手によって行われたものである。

思春期を迎えている中学生には刺激が強すぎる。それも、男性との関わりが少ない女子校生ならば尚更だろう。

身体を密着させている今の状況は、夕映の思考回路を爆発寸前にまでもっていくには充分すぎるほどの威力を持っていた。

（し、白銀さんの顔が……ち、近いです！そ、それに、白銀さんの匂いまで……。うう、は、恥ずかしい……）

いつもよりも近くで見る白銀の端正な顔立ち。それに加え、白銀の匂いまで感じ取れる距離。

これではまるで、恋人のようではないかと、自分で想像して悶えてしまう。

（な、な、何を考えているんですかわたしはー！？だ、ダメです！？このままでは……！！）

そうやって、顔を赤くして百面相している夕映を、白銀は不思議そうに見つめるのであった。

11時間目 一爺さんは所詮、爺さんだったのさ（前書き）

なんとなく思いついたので後書きにおまけを載せました。

特に意味はないです。

11時間目 一爺さんは所詮、爺さんだったのさ

出題される問題を解きながら長い長い階段を登り続けたバカレンジャー一行は、その苦勞の甲斐あって、漸く地上への直通エレベーターへと辿り着いた。

その頃には皆、息も絶え絶えといった様子ではあったが、ここから脱出できる希望を見つけた瞬間に、そんなものは吹き飛んでいた。

「やったー！地上一階へGO！！」

エレベーター内に全員が入り込むと、かなり窮屈に感じられるが、これだけの大人数が乗ってしまったえばそれも仕方の無いことだろう。その際、白銀に抱きかかえられていた夕映は、更に白銀との密着率が高まったお陰でゆでだこ状態になってだったが、そのことに気付いた者は誰も居なかった。

『重量OVERです』

しかし、喜びも束の間。ブブーッ！！というブザー音と共に聞こえてきたのは、無情なアナウンスだった。

花も恥じらう……かどうかは分からないが、それでもうら若き乙女たちには死刑宣告のように聞こえた。

「ま、明らかに定員オーバーだもんな。仕方ないか」

「なに冷静に分析してんのよアンタはー！！？」

諦観を滲ませるような白銀の呟きに、涙目でついつい叫んでしまう

明日菜ではあったが、白銀の言うことは紛れもない事実だ。

もしもこのエレベーターに乗っている人間が八人ではなく、七人だったならば、このエレベーターは動いたかもしれない。現に、白銀がこのエレベーターから出た瞬間、ブザーが止まったからだ。

しかし、それはもしかという仮定の話だ。それに、エレベーターに乗る人物が一人だけでも、このエレベーターは動かないだろう。

（恐らく、このエレベーターは俺の持つ蒼海の書とメルキセデクの書に反応しているんだろうな。地下から貴重な魔法書が持ちだせないように細工がしてある。これが爺さんの余裕の正体ってワケだ）

今白銀が推察したように、このエレベーターは魔法書の存在を感知すると動かなくなる。

これも盗掘者用のトラップだ。あともう少しという希望を持たせ、所持品を全て外せば動くかもしれない。そう思わせることで、盗掘者に自分から所持品を捨てるように誘導しているのだ。

単純でいながらも相手の心理を利用した効率的な手だ。やはり近右衛門は意地が悪い。

「おい、明日菜。これ、借りてくぞ」

「へ？ ちょ、ちょっと!？」

白銀は明日菜が手にしていたメルキセデクの書をスッと抜き取り、エレベーターから出た。

そうすると、さっきまでけたたましく鳴っていたブザー音が止まった。

これでエレベーターも動くようになっただろう。白銀はそう判断して迫りくるゴーレムへと歩を進める。

「な、何するつもりよ!？」

「なになって、決まってんだろ？」

白銀は不敵に笑いながら、言った。

「あのムカつくゴーレムをぶっ潰すんだよ」

「……………はあ!？」

白銀の突拍子もない一言に、思わず聞き返す明日菜。

他のメンバーも啞然とした表情で白銀を凝視した。

白銀は、ま、こうなるわな。と言って苦笑する。こういう反応をされるのは予想していたことだ。それに対して思うことは無い。

稼働条件を満たしたエレベーターのドアが閉まっていく。

「そ、そんな!？ ゴーレムの相手なら僕が……」

「ネギ。お前は教師だろうが。テスト直前までそのバカどもの勉強を見るのがお前の仕事だ」

「で、でも……………」

「言っただろう、ネギ。お前はお前の仕事をしろ」

白銀に何か言おうとしたネギだったが、その前にドアが完全に閉まり、エレベーターは地上へと移動を開始した。

動き始めたエレベーターを停止させることは出来ない。しかも、これは地上への一方通行だ。戻ってくることも出来ないだろう。

「爺さん。これで文句ないだろう」

白銀は歩みを止めたゴーレム————近右衛門に、白銀は話しかけた。

『フオフオフオ……。そうじゃのう、白銀君のお陰で万事上手くいったわい』

流石にメルキセデクの書を奪われた時は胆を冷やしたがの。そういつて笑う近右衛門を見て、ふつふつと溜まっていた怒りが再燃してきた白銀。

そんな白銀の様子には全く気付かず笑い続ける近右衛門。

白銀の担いでいるナツプサックに入っている蒼海の書は、つい最近感じた白銀の怒気に敏感に反応してブルブル震えていた。よほど怖かったのだろう。トラウマにならなければいいが。

「……………なあ、爺さん」

『フオフオフオ……。なんじゃ、白銀君や?』

「こいつと一緒に地に落ちろ!!」

『フォッ!?!』

白銀は右手に持っていたメルキセデクの書を、全力でゴーレムの頭部に向けて投げつけた。

突然の攻撃に近右衛門も反応することが出来ず、白銀の魔力の籠められた、光り輝くメルキセデクの書が頭部にクリーンヒット。

近右衛門はフォ~~~~!!?という断末魔を挙げながら暗い地の底へと落ちていった。

悪は滅した。これで暫くは静かになるだろう。

白銀は満足したように頷き、近くにあった壁面を引き剥がす。

そこに現れたのは地上へと続く長い梯子である。

許可された魔法書を持ち出す正規のルートである。このことは既に近右衛門から聞き出していたので、白銀は最初からこの道から脱出するつもりだったのだ。

「さて、と……。あいつらが騒ぎ出す前にさっさと脱出しますかね」

白銀はそう呟くと、飛行魔法を発動させて地上へと向かった。

「外に出れたーッ!!」

「いえーい!!」

そう歓喜の声を挙げるのは、数日ぶりに太陽の日差しを浴びたバカレンジャー一行である。

数々の苦難を乗り越えて、地底図書室からの脱出に成功したのだ。無理もない。

しかし、そんな中で一人、暗い感情を滲ませる者がいた。そう、ネギである。

生来のお人好しであり、しかもいつまでも過去のことであじうじと考え込んでしまうネギのことである。どうせ地下においてきてしまった白銀のことで悩んでいるのだろう。

悪く言えば能天気なまき絵、楓、古は全く気にしていない。夕映と

木乃香も多少気がかりではあったものの、白銀ならば大丈夫だろう
とと思っているので大して気にしていない。

明日菜も白銀のことを心配はしていたが、目の前で自分以上に暗い
顔をしているネギを見ていると、不思議と冷静になってくる。

（そういえば、前に白銀がいなくなった時もこんな感じだったわね）

長い付き合いの木乃香が心配していないのなら、自分が心配しても
意味がないのかもしれない。

そう思い始めてきた頃だった。背後の壁が崩れたのは。

「へ？」

突然の出来事に目が点になる明日菜。

他のメンバーも壁の崩れる音に気付き、それを凝視する。

「げほっげほっ……。埃スゲ！？こんな聞いてねーぞ」

そう愚痴りながら、崩れた壁から出てくる影があった。

土煙でよく見えないが、聞き覚えのある声に表情の明るくなるバカ
レンジャー一行。

「なんだ。総出でお出迎えとは豪勢じゃないか」

「白銀さん！」

そこから出てきたのは、想像通り、白銀であった。

皆の視線が白銀の両手に降り注ぐが、その手に魔法書はなかった。

「魔法の本は捨ててきたからな。期待しても無駄だぞ」

視線に気づいた白銀が先手を打つ。

これにはバカレンジャー一行も落胆を隠せない。

別に魔法の本などなくても構わないが、それでも楽に頭が良くなるなら欲しかった。

「さて、期末テストまでもう時間がないぞ。俺はこれから帰って寝るが、お前らは勉強しなくていいのか？」

白銀のその言葉に、だんだんと血の気を失っていく。

確かに地底図書室で勉強はしていたが、彼女らはバカレンジャーという烙印を押された劣等生だ。

テストの直前まで勉強を続ける必要がある。

「い、いそげー!？」

ネギを筆頭に、血相を変えて走り出す生徒たち。足を挫いた夕映も、楓が運んでいるので問題はないだろう。

白銀はその光景を見て、苦笑するのであった。

期末テスト当日。

無事に全てのテストを終えた白銀は、近右衛門のいる学園長室を訪れていた。

「おい、爺さん。今度ふざけた真似してくれたら、そのぬらりひよ

んみてえな頭がどうなっても知らねーからな」

「て、手厳しいのう……」

白銀の余りの物言いに、思わず冷や汗を流す近右衛門。額には、何故か包帯を巻いていた。

どこかで転びでもしたのだろうか？見る者が見れば痛々しく映るのだろうが、それを見た白銀は、何故か満足そうな表情を浮かべていた。

「で、ここにあいつらの解答用紙があるのは、爺さんが採点したからか？」

「うむ。ほれ、中々の出来じゃろう？」

近右衛門は机の上に広げてあった答案用紙を白銀に手渡す。

白銀は早速それに目を通す。ややあってから、ほう、と感心したような息を漏らした。

それなりにいい出来だったのかもしれない。

「これならネギの課題もクリアできるかもな」

「そうじゃのう。……そういえば、白銀君はどうじゃったんじゃ？」

「どうって……。そんなもん、あとから刀子さんに訊けよ。俺だつて点数までは分からねえんだから」

「手ごたえをきいとるんじゃよ」

「……んなもん、いつも通りとしか答えようがないね」

白銀の言ういつも通りとは、恐らくはクラスの平均点よりは上だろうという意味だ。

可もなく不可もなく。それが白銀のいつも通りの成績だ。

「なるほどのう」

「ま、テストなんて赤点さえとらなきゃ文句はねえだろう？」

「まあそうなんじゃが、学校の最高責任者の前で言う言葉とは思えんのう」

「俺はテストに対する一般的な考えを述べたまでだ」

白銀の堂々とした言いように、少々辟易する近右衛門。どこでどう教育を間違えたのだろうか。

「んなことより、いつまでもここに居ていいのかよ」

「ひょ？」

「発表会は報道部の方で勝手に進行する予定だろ？早く報道部のとこに持ってかなくていいのか？」

「……………」

白銀の言葉にしばしの間瞑目する近右衛門。それからたっぷり三十秒ほど経ってから、漸く近右衛門は口を開いた。

「白銀君や。スマンが、それを渡してきてくれんかのう」

「……………忘れてたんだな？」

「いやそれは……………」

「わ・す・れ・て・た・ん・だ・な？」

「……………ハイ」

白銀から発せられる凄まじいプレッシャーと怒気により、しゅんと項垂れるクソジジイ。

はあ、と白銀は溜息を吐き、目頭を指の腹で揉む。このクソジジイをどうしてくれようか。近右衛門には、白銀の怒気を孕んだ声が聞こえた気がした。

冷や汗が全身から噴き出る。これは取り返しのつかないミスだ。既に報道部は発表会を始めている。その証拠に、第二学年の成績を良い順に発表しましょう！という進行役の声が放送されているのが聞こえる。

今から報道部の元へ答案用紙を持っていても間に合わないだろう。それでも、持っていないわけにはいかない。

白銀はもう一度、深い溜息を吐いてから学園長室を後にした。

一人取り残された近右衛門は、学園長室の窓から見えた光景に血相を変える。

これは流石に不味いと思い、近右衛門は老体に鞭をうち、駅まで急いだ。

報道部による成績発表会。2-Aの生徒はそれを固唾を吞んで見守っていたが、2-Aが呼ばれることは終ぞなかった。

これは2-Aが最下位であることが決定された瞬間だった。

2-Aが最下位。それは普段通りの結果に過ぎない。だが、今回ばかりはその結果を認める訳にはいかなかった。

ネギの最終課題。これを達成することが出来なければ、ネギが教師として認められることは無い。

そして、その最終課題こそが、2-Aの最下位脱出だったのだ。

故に、今回の期末テストの結果は、ネギが最終課題をクリアできなかったことを意味する。

それを十二分に理解していた2-Aの生徒が茫然と立ち尽くすのは、無理からぬことだった。

当事者であるネギは、皆に気付かれぬようにひっそりとその場から立ち去った。

マジステル・マジ
立派な魔法使いの称号。それは魔法使いなら誰もが憧れる英雄ヒーローと同義である。

まだ子供で、しかも父親を尊敬し、その後を追い続けているネギにとっては、立派な魔法使いとは父に近づける唯一の方法だった。

しかし、その夢は閉ざされた。

それについて思うところがないわけではないが、自分の為に一生懸命頑張ってくれた皆に対して、嬉しいと思うことはあっても、決して恨みをぶつけることはなかった。

課題を達成出来なかったのは、結局のところ、自分が未熟だったから。自分の實力不足を他人の所為にはしたくなかった。

「こども一枚。新宿まで……」

「ネギ！」

故郷へと帰る為、麻帆良学園を出ようとしたネギを呼び止める者が一人。そう、明日菜である。

遠い異国の地で、どこか自分の従姉を思わせるその風貌に、何度励まされたのか、ネギには分からない。

今も自分を引き留めようと必死に説得しようとしてくれている。そのことが嬉しくて堪らない。それでも、自分がここに居ることは許されないのだ。

「……………さよならっ!!」

「あっ!? コラ!」

名残惜しくもあり、寂しくもあった心を押し隠し、決死の思いで逃げ出す。

そうでもしなくては、とても帰れそうになかったから。

「ひゃ…!?!」

「バカ! 行っちゃダメって言ってるでしょ!!」

それでも、背後から羽交い絞めにされては振りほどくことも出来ない。

「そりゃ、最初はガキでバカなことばかりするから怒ったけど……。私なんかよりちゃんと目的持ってがんばってるから感心してたんだよ! なのに…」

「ア……、アスナさん…」

魔法を使えば簡単に抜け出せるのに、ずっとこのままでもいいと思

つてしまう。

このまま、ずっとずっと麻帆良で先生を続けていきたいと思ってしまう。

折角覚悟を決めたというのに、どうしてこんなにも心が揺れるのか、ネギにも分からなかった。

「ネギ坊主ーッ!!」

そうこうしている内に、テストの遅刻組がネギと明日菜を追って駅まで走ってくる。

それを見た明日菜は、驚きで拘束していた腕の力を緩める。

「い、いまさら会わせる顔がないです! さよならアスナさん!!」

「あ、ネギ!」

それを好機とばかりにネギは逃げ出す。

これ以上ここに居ると、帰る決心が確実に鈍ってしまうからだ。しかし、そう上手くはいかない。

まき絵のリボンが宙を舞い、ネギの足に絡みつく。

「あぶゆ」

「キャー!? ゴメン、ネギ君!」

片足を取られ、バランスを崩したネギは転んでしまった。

意図してやったことではないにしろ、ネギに痛い思いをさせてしまったまき絵は叫ぶように謝る。

その後は皆で取り囲んでスーパー説得タイムだ。これにはネギもたじたじである。

「フオフオフオ。生徒に慕われているようじゃの、ネギ君や」

「がっ…、学園長先生!？」

フオフオフオ…とバルタン笑いをしながら現れたのは近右衛門であつた。

見た目は普段と変わらず、ひょうひょうとしているが、内心では間に合つてよかったと、安堵していた。

これでネギが電車に乗ってどこかへ行ってしまったのなら、白銀の堪忍袋の緒が切れるどころか、火山が噴火して大変なことになるところだつた。

（白銀君が本気で怒ると手に負えんからのう）

一度爆発しては取り返しがつかなくなる。それだけは避けたい近右衛門だつた。

しかし、そんなことはおくびにも出さずに事実を告げる。

「いやー、すまんかったの。ネギ君。実はの…、遅刻組の採点をワシがやっとなつてのう。うっかりクラス全体と合計するのを忘れとつたんじゃよ」

「「「えー！ー！？何ですかそれ!？」」」

クラスの合計値が違えば、当然の如く、平均点も変わっていく。もしかしたら最下位ではないかもしれないと、ほのかに希望が芽生えた。

しかし、その中にはバカレンジャーのものが含まれている。いくら自分たちの点数を足したぐらいでは結果は変わらないのでは?とい

う不安も同時に芽生えていた。

「……ん？ フォフォフォ。その心配は無用のようじゃよ」

「え？ それってどういう……」

近右衛門の言葉に、ネギが疑問の声を挙げた。が、それを遮るようにして、駅構内にあるスピーカーからブーン、という独特の音が響いた。

『あーあー、テスト。ただ今マイクのテスト中……。おい、もう喋ってもいいのか？』

「こ、この声……」

「しろくんやー」

聞き覚えのある声に、夕映と木乃香が反応する。

スピーカーから聞こえた声の主は、確かに白銀のものだ。では何故、白銀の声がするのだろうか？

『あー、さっきの第二学年クラス成績順位だが、集計結果に間違いがあったので、順位の変更を伝える』

「順位の変更？」

「も、もしかして……」

『今日、期末テストに遅刻した生徒が八人いた。その採点を行ったのは学園長だ。だが、学園長は成績発表のことをすっかり忘れて

いた為、遅刻者の在籍している二一Aに八人分の点数は反映されていなかった』

淡々と事実のみを伝える白銀。だが、“学園長”の部分だけはやけに強調していた。

そのことに気付いている近右衛門は全身の毛穴が開くを感じていた。

『このまま結果を伝えるのは盛り上がり欠けるな。……まあついでだし、遅刻者の点数を読み上げようと思う。……おーおー、予想以上にノリがいいのな。よっし、じゃあ読むぞ。佐々木まき絵、平均点66点』

「ええっ!?!うそっ……66点!?!」

今まで取ったことのない高得点に驚愕するまき絵。

それでも一般的な点数を考えれば低い方だが、彼女にとっては間違いなく自己ベストだ。今までの点数を鑑みれば、誇ってもいいレベルだ。

『時間もないし、どんどんいくぞ。古菲67点。長瀬楓63点。綾瀬夕映63点。……まあ、バカレンジャーとか呼ばれてる割にはいい点数とれてるな』

「ホ……、ホントアルか!?!」

自分でも驚きの点数に思わず聞き返してしまう古。楓も声には出さないが嬉しげにしている。

しかも、何故か周りで事の成り行きを見守っていた群衆が拍手をしている。

本当にノリがいい連中ばかりである。

『お、ここから急に上がるな。早乙女ハルナ81点。宮崎のどか95点。近衛木乃香91点。流石は図書館探検部ってとこだな』

いきなり高い点数が読み上げられたからか、群衆からおお～、という感心したようなどよめきが聞こえる。

さっきまではそれなりの点数ばかりだったのも関係しているのだろう。

『で、最後に神楽坂明日菜……』

自分の名前が呼ばれてビクリと肩を震わせる明日菜。

バカレンジャーの中でも特にヒドイ成績なのだ。緊張してしまうのは当然のことだろう。

一瞬の沈黙。白銀は少しだけ時間を溜めてから、にやっと笑みを作ってから、言った。

『71点だ。凄いいじゃないか。バカレンジャーの中じゃトップだぞ』

明日菜は一瞬きょとんとしてから、目を輝かせる。

「あ……、じゃあ……！」

『これらを合計すると、二一Aの平均点は81.0点となり、0.2点差で二一Aがトップだ！！喜べネギ！お前は正式に教員として認められた！！』

歓声が、湧いた。

事の成り行きを見守っていた群衆は溢れんばかりの拍手を贈り、二

—Aの生徒たちは喜びを全身で表していた。
そんな中、一番の当事者たるネギは、茫然と立ち尽くしていた。
理解できなかったのだ。万年最下位だった二一Aが、何故学年一位
になれたのかを。

「魔法の本もないのに、一体どうやって……!？」

「これのことかの？」

「あ!？」

近右衛門が懷から取り出したのは一冊の古い蔵書だった。そう、白
銀が捨ててきたと言っていた、あのメルキセデクの書だ。

「こんなもので簡単に頭が良くなったら苦勞はせんて。今回のこと
はな、全ては皆の実力じゃよ、実力」

全くもってその通りである。

大体、魔法の本の力でテストを乗り切ったとしても、それは所詮そ
の場しのぎのものでしかない。

どんなものを使ったとしても、それはただの付け焼刃だ。そんなも
のに頼っていたのでは、本当の実力を身につけることなどできない。
それで損をするのは、結局のところ自分なのだ。何かに縋り付こう
とした人間はいつも後悔することになる。あの時あしておけば良
かったと。

「最終課題では子供のネギ君が今後も先生としてやっていけるかを
見たかったのじゃ……。図書館島の数々のトラップにもめげずによ
ー頑張ったの。二一Aを学年一位にしてしまうとは、まったくオド
ロキじゃわい」

他の生徒たちのお陰でもあるがの。近右衛門はそう言って笑う。
ここまで説明されれば、ネギにも大体の事情は把握できた。つまり
は試されていたのだ。

恐らくは次のテストでビリになったクラスは大変なことになるとい
う噂も、出所は近右衛門だったのだろう。

ずっと近右衛門の掌の上だったのだ。そして白銀もこのことを知っ
ていたに違いない。

だからあの時、必要もないのにメルキセデクの手を持ってエレベ
ーターから降りたのだ。

自分の為に、ここまで大がかりな試練を、近右衛門は与えた。それ
は逆に言えば期待されていることになる。

そして今回の最終課題を、ネギは見事にクリアし、近右衛門の期待
に応えることが出来た。

近右衛門は真っ直ぐネギを見据えて、言った。

「合格じゃよ、ネギ君!! これからは更に精進じゃな」

「あ……、はいっ!!」

ネギは力強く頷いた。

これからネギは二-Aの皆と……、明日菜たちと共に同じ時間過
ごすことが許されたのだ。こんなに嬉しいことはない。

ネギは明日菜を見上げる。明日菜は笑っていた。

「ま、とりあえず、新学期からもよろしくね」

「は、はいっ! よろしく願います!!」

これでネギは、4月2日から麻帆良学園女子中等部の教諭として、

正式に認定された。

ネギは故郷にいる従姉を想う。

（お姉ちゃん、故郷^{くに}に帰るのは、もう少し先になりそうです）

賑やかな教え子たちにもみくちゃんにされながら、ネギは笑っていた。
これからも、こんな日々が続くことに感謝して。

11時間目 一爺さんは所詮、爺さんだったのさ（後書き）

おまけ

『その後の白銀』

「と、刀子さん？」

「白銀。どうして貴方はあんなことをしたのですか？」

「い、いやぁ……、なんででしょうねえ？」

「白銀君。正直に答えた方が身の為ですよ」

「し、シスターシャークティ！？ど、どうしてシスターがここに！？」

「私が呼んだのです。さあ、観念なさい」

「す、すみませんでしたー！」

「あ！？ま、待ちなさい！？」

「白銀君！主の意思に逆らうのですか！」

男でありながら、女子中等部で目立つ行動をとってしまった白銀は、刀子とシスターシャークティに説教されるのであった。

めでたしめでたし。

「めでたくなー!？」

12時間目ー喫茶店で騒ぐなよ(前書き)

なんかもう、色々と駄目かもしれない……。。

12時間目 喫茶店で騒ぐなよ

三月も終わりが近づいている今日この頃、麻帆良学園は春休みを迎えていた。

麻帆良学園はエスカレーター式なので、この春卒業した生徒たちは学校と学生寮が変わるだけで、目立った変化は今のところない。

変わったところがあるとすれば、県外へ進学した者や、就職先を見つけた卒業生がいなくなることぐらいだろう。

四月になる頃には、新しく麻帆良の住人になる生徒も増えるのだろうが、今のところはそういった生徒は少ない。

寮から出て行くものと新しく住まうもの。どちらも忙しくなる季節である。

しかし、そんなものは関係ねえとばかりに、春休みを満喫する生徒たち。その中には当然の如く、二一Aの少女たちも含まれていた。休みだからか、人通りの多い商店街を、活発そうな四人組の少女たちが歩いていった。

「いやー、それにしてもさ。白銀さんがOKしてくれて助かったよね！」

街中を動きやすい服で闊歩しているのは裕奈である。

中学生になってから急激に成長し続けている胸が、激しく自己主張している。

「うん……。部活の休みが被ってる日、あんまりなかったから、丁度良かったと思う」

裕奈の後ろを歩いているのは、とても中学生には見えない風貌の少

女、アキラである。

モデルのようなメリハリのある体型に、170センチはあるかという身長は、可愛いと言うよりは綺麗でカッコいい、といったところか。

目下の悩みは大学生に間違われることである。

「まき絵は図書館島で遭難した時に会ったんやろ？元氣やった、白銀さん？」

関西特有のイントネーションでまき絵に話しかけたのは亜子だった。前を歩く二人とは違い、見た目は年相応の可愛い少女だ。ただ、髪と瞳の色素が薄いため、そこだけは普通とはいえない。といっても、麻帆良は奇人変人が多いので、特別目立つことは無かった。

「うん、元氣そうだったよー。料理も美味しかったし……」

そう言って白銀の作ったカレーの味を思い出したのか、恍惚とした表情となったのはまき絵である。

花より団子という言葉が実によく似合う。

運動部の仲良し四人組が揃って出かけることはそれほど珍しいことではない。

部活が休みの時は大抵このメンバーで過ごしている。しかし、今回は少しばかり事情が違う。

彼女たちは、以前しつこいナンパ男どもに言い寄られて困っていたところを白銀に助けられたことがある。

それ以来、ずっとお礼がしたいと思っていたが、都合の良い日がなくて、ずるずると今日まで何も出来ずにいたのだ。

だが、春休みのような長期休暇の時期ならばと、全員の部活休みが

被っている日に約束を入れたのだ。

お礼といっても、特に準備しているわけではない。全くのノープランだ。

これでいいのだろうか、亜子とアキラは悩んだが、そうやって気難しく考える方が白銀さんは嫌がると思う。というまき絵の一言により、深く考えるのを止めた。

「待ち合わせは11時に駅前の喫茶店だったよね」

「うん。私もそう聞いている」

待ち合わせ場所と時間を指定したのは白銀だった。

何でも、午前中は少し用事があるので、それを先に済ませておきたらしい。

あの日以来、白銀に一目惚れした亜子は浮かれていた。想い人に久しぶりに会えるのだ。無理もない。

会ったら何を話そうかと、うきうき気分で考えていた。その姿は、正に恋する乙女である。

そしてもう一人、白銀に好意をよせているのがアキラである。

アキラの場合はしっかりと自覚している訳ではないが、恋に近い感情を抱いているのは確かだ。

とりあえず、会ったらこの間のお礼を言おう。アキラはそう考えていた。義理堅いことである。

現在の時刻は10時15分。約束した時間より大分早い。

運動部はよく朝練をするので、朝早くに起きるのが習慣になっている。まき絵や裕奈はそれほど得意ではないが。

折角の休みだ。ぐうたら寝て過ごすよりも、買い物などをして時間を潰した方が有意義だと考え、この時間に指定場所付近をうろつこうということになったのだ。

「あ、あれじゃない？白銀さんの言ってた喫茶店」

まき絵の指差した方向には、オシャレな雰囲気醸し出す、真新しい喫茶店があった。

看板には『アーネンエルベ』と書かれてある。白銀の指定した喫茶店と同じ名前だ。ここで間違いないだろう。

「あ！？白銀さんがおる！？」

「え？どこどこ！？」

「ほら、あそこ！」

亜子が指をさした先には、オープンテラスで飲み物を飲んでいる白銀の姿があった。

約束した時間はまだ先だ。午前中は用事があると言っていたのだが、もう用事は済んだのだろうか？

裕奈は大きく手を振り、大声で白銀を呼ぼうとした直前で、動きを止めた。

白銀がくつろいでいるテーブルに座ろうとしている女性がいたからだ。裕奈の目がキラリと光る。何か面白そうなものを見つけた時の目だ。

裕奈は何か言おうとしている三人に静かに隠れるように促した。

「ねえ、ゆうな。どうして隠れるの？」

裕奈のなすがままに物陰に隠れたアキラが、困惑しながら問う。

このメンバーの中では常識的な思考回路を持つアキラは、裕奈の奇行に納得がいかなかったのだろう。その隣りで亜子が頷いているのが見える。

アキラの疑問に、裕奈はニヤリと笑いながら答える。

「だって、なんか面白そーじゃん。それに……、あの女の人が誰なのか、気になるでしょ？」

亜子とアキラは思わず黙り込んでしまう。

こそこそ隠れて覗き見するような行為は気がひけるが、白銀と一緒に居る女性が気にかかるのも事実だ。

結局、強引な裕奈に押し切られ、物陰から様子を窺うことになったアキラたちなのであった。

白銀はコーヒーを一口含み、喉の渇きを潤してから、約束していた時間よりも一時間近く遅刻してきた少女に目を向けた。

「で、なんでお前はこんなに遅れてきたんだよ」

約束した時間は9時30分。もう直ぐ10時20分になろうかという頃合いだ。

今飲んでいるコーヒーも、既に3杯目である。時間稼ぎに軽食すらとったというのに、ここまで待たされるとは思わなかった。

白銀は半眼で少女を睨む。

「それについては私も悪かったと思ってるわ。でもね、こっちはこっちで事情があるのよ」

彼女はバツが悪そうに目を逸らしながら、弁明する。

彼女の弁によると、さあ今から待ち合わせ場所に行こうかと腰を上げた瞬間、急に仕事が入ったのだそう。それも、“裏”の仕事である。

そう、彼女も白銀と同じ魔法生徒の一人。名を伊吹綾いぶきあやという。彼女は麻帆良でも数少ない治癒魔法の使い手だ。

今日のように、急に治療の仕事が入るのは珍しいことではない。

治療を終えた頃には時計の針は10時を越えており、それから急いで身支度を済ませてこちらに飛んできたのだそう。

確かに、彼女は仕事着である白衣を身に着けたままだ。本当に必要最低限の身支度しか済ませなかったのだろう。

「……まあいいさ。そういう事情があるなら仕方ない。今回の件については許そう。ただ、遅れるときは連絡してくれ」

そんな余裕さえない時は仕方ないけどな。白銀はそういつてから、再びコーヒーを啜る。

綾も今回は本当に悪かったと思っているのか、素直に頭を下げた。

「で、だ……。今回お前を呼び出したのは、これを渡したかったからだ」

白銀はさっさと要件を済ませる為に一冊の本を取り出した。

古びれたその本は、白銀が地底図書室から持ち出した蒼海の書だった。

綾はそれを見て顔を輝かせる。

「それが白銀の言っていた蒼海の書か!？」

「ああ、これをお前にやる。俺には必要のないものだからな」

以前説明したように、蒼海の書は水属性の魔法書だ。特に治癒魔法について記されている。

水魔法は治癒魔法と相性のいい属性で、治癒魔法を使える者の殆どが水属性の魔法を学んでいる。例え適性がなくともだ。

綾の得意な属性は水と地と風の三つ。そこに治癒魔法に特化した蒼海の書が加われば、かなり技術的な向上が見られる筈だ。

「ありがとう！この借りはいつか返すよ」

「そうか。それは楽しみだな。期待させてもらおう」

嬉しそうに蒼海の書を受け取る綾。心の底から喜んでいるのがわかる。

これで蒼海の書の願いも叶った。一石二鳥である。

図書館島で散々イライラさせられた甲斐があったというものだ。

綾の治療術士としての能力は麻帆良でも一、二を争うほどのものだ。それほどの人物に借りを作ることが出来ただけでも儲けものだ。

（俺に治癒魔法は必要ないが、俺の知り合いには必要だからな。こういうコネはいつか役に立つだろう）

例え自分に必要のないものでも、他人にとっては必要となることは多い。

ならば、それを有効活用しない手はないだろう。使えるモノは何でも使う。それが白銀のスタンスだ。

「それじゃ、私はそろそろ行くとするよ」

「そうか。じゃあな」

白銀の言っていた用事とは、綾に蒼海の書を渡すことだ。

綾もこの後は裏関係の仕事があるので、白銀に軽く礼をいった後はきりっとした表情に戻っていた。

二人とも裏の仕事は何年も前からやっている。会話は必要最低限で済みます。基本的に無駄話はしないのだ。といっても、これが完全なオフの時ならば話は別だが。

（さて……と。これで俺の用事は済んだ。あとは、あいつらの相手をして……と。）

白銀は向こうの物陰から聞き耳を立てている四人に視線を向ける。

「その四人。覗き見とは感心しないな」

「ウソッ!? な、なんでわかるの!?!」

「ま、まき絵……。声……」

「ど、どどどどどないしょ!?!」

「亜子。驚きすぎだって」

白銀の言葉に面白いぐらいに分かりやすい反応をする運動部四人組なのであった。

「それで、白銀さんはさっきの女の人とどういう関係なんですか？」

「いや、開き直るな」

白銀に見つかり、言い逃れが出来なくなった裕奈が堂々と質問してきた内容に、思わず突っ込んでしまった白銀。すっかりツツコミ役が定着してしまった。

このまま脊髓反射でツツコミをいれてしまうようになってしまったら、ボケることも難しくなってしまう。それは白銀としても作者としても避けたいところだ。

「いや、作者ってなんだよ!？」

「……白銀さん？」

「な、なんでもない。忘れてくれ……」

頭を抱える白銀を見て、深くは訊かない方がよさそうだと判断したアキラは聞かなかったことにした。他の面々も同じ判断をしたのだろう。すぐに何事もなかったかのように会話を再開した。

「で、あの女の人との関係は？」

「……ただの昔馴染みだ」

綾と出会ったのは五年ほど前の話。白銀が12歳の時のことだ。その頃から友人としての付き合いがある。

しかし、五年も経てば友人としては親しすぎる。かといって、親友

と呼べるほどの仲でもない。

幼馴染というには出会うのが遅すぎたため、白銀は綾との関係を『昔馴染み』と称したのだ。他にも候補としては仕事仲間や腐れ縁などもあったが、一番無難なものを選んだ。

「それ以上の関係になりたいとは思わないんですか？」

「今のところ、あいつにそういった感情を抱いたことは無い」

力強く断言する白銀に、安堵した者が約二名ほどいたが、それについては深く追及するつもりがないのか、裕奈は更に質問を重ねる。

「じゃあ、好きな人とか気になる人はいないんですか？」

「いないな」

即答だった。

それを聞いて、またもや安堵する者が約二名。恋する乙女は忙しいのである。

「……そんなことより、そろそろ移動しないか？ずっとこの喫茶店にいる訳にもいかんだろう」

白銀は居心地が悪そうに周囲を見渡す。

白銀は一時間以上もの時間、コーヒーを啜り、軽食を取ること店で居座り続けたのだ。

ただでさえ目立つ容姿をしているというのに、更には四人もの美少女と共に仲良さげに会話をしている。

これで人の目を引かない筈がなかった。その証拠に、喫茶店の店員

や他の客は勿論のこと、通行人にまでちらちらと視線を向けられている。

この状況下でリラックスできるほど、白銀は図太くはない。裕奈たちも今更ながらにその視線に気づき、その場に気まずい雰囲気の流れた。

「ほれ、行くぞ」

「わわっ！？待ってよ白銀さん！？」

その雰囲気を感じ取った白銀は、ここから抜け出す為にさっさと会計を済ませようとレジへと向かった。

その後を慌てながら、運動部の仲良し四人組が追いかけるのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7443k/>

魔法生徒 白銀

2011年7月28日01時36分発行